

キャリア教育推進に関する調査研究

今日的課題であるキャリア教育について、その先進的な取組、事例の研究を通して、キャリア教育の在り方と推進のための方策を研究した。これまでの研究を基に作成した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」での教育活動例を小中高等学校において実践し、その成果と課題を明らかにするとともに、小中高等学校の連携を図るための具体的な方策を検討した。また、高等学校普通科における、キャリア教育の組織的・体系的な指導計画等について具体的な提言を行った。

<検索用キーワード> キャリア教育 勤労観 職業観 職場体験 インターンシップ
学習プログラム コミュニケーション能力 高等学校普通科

研究会委員

西尾市立西尾小学校教諭	土橋 直美 (平成 18, 19 年度)
三好町立三吉小学校教諭	黒田 和秀 (平成 18, 19 年度)
豊橋市立高根小学校教諭	川本 貴博 (平成 18, 19 年度)
瀬戸市立祖東中学校教諭	此下 明雄 (平成 17, 18 年度)
瀬戸市立本山中学校教諭	中崎 毅 (平成 19 年度)
東海市立横須賀中学校教諭	廣田 雅明 (平成 17, 18, 19 年度)
田原市立福江中学校教諭 (現田原市立福江小学校教頭)	山田 淑和 (平成 17, 18 年度)
田原市立福江中学校教諭	久瀬 正弘 (平成 19 年度)
県立津島北高等学校教諭	白山 素子 (平成 17, 18, 19 年度)
県立鶴城丘高等学校教諭	川原 英範 (平成 17, 18, 19 年度)
県立蒲郡高等学校教諭	石原 敦仁 (平成 17, 18, 19 年度)
総合教育センター教科研究室長 (現県立守山高等学校教頭)	小久保清隆 (平成 17 年度)
総合教育センター教科研究室長	都築 数雄 (平成 17, 18 年度主務者, 19 年度)
総合教育センター研究指導主事	吉原 文子 (平成 17, 18, 19 年度)
総合教育センター研究指導主事	川澄 誠 (平成 18 年度, 19 年度主務者)

1 はじめに

近年の産業・経済状況の構造的な変化や、雇用の多様化・流動化等を背景として、就職・進学を問わず、児童生徒の進路をめぐる環境は大きく変化しつつある。さらに、現在、児童生徒の勤労観・職業観の希薄化、社会人としての基礎的な資質をめぐる課題、高い早期離職率、「ニート」と呼ばれる若者の存在等が社会的な注目を集め、問題となっている。

こうした状況の下で、児童生徒が「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するかもしれない様々な課題に、柔軟にたくましく対応しながら、社会的に自立可能な資質を育むキャリア教育が求められている。

その一方で、キャリア教育の必要性は理解されながらも、現場での対応は様々であり、積極的に取

り組んでいる学校とそうでない学校には大きな差があり、積極的に取り組んでいる学校でも特定の教員等の熱意と努力によるところが大きい。残念ながら、キャリア教育に対する認識が浸透していないのが実情である。

2 キャリア教育の定義

「キャリア」とは、一般に生涯にわたる経歴、専門的スキルを要する職業に就いていることなどの他、解釈や意味付けは多様であるが、その中でも共通する概念と意味がある。それは「キャリア」は「個人」と「働くこと」との関係に成立する概念であり、個人から切り離して考えられないということである。

文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成16年1月）では、「キャリア」を次のように定義している。

「キャリア」の定義

「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」ととらえる。

また、愛知県産業教育審議会答申「新しい時代に対応したキャリア教育の在り方について」（平成18年2月）では、次のように定義している。

一人一人の生き方や価値観、勤労観・職業観と深く結びつきながら、具体的な職業の選択・決定に始まり、人生において社会人、職業人として生きる過程におけるさまざまな経験をとおして人生を形成していくものである。

つまり、「キャリア」は、人生の中で「働くこと」をどのように意味付けるかということ、人それぞれの価値観、職業観、勤労観等と結び付けながら、様々な体験を通し、時間をかけて積み上げていくものである。「キャリア」の形成に重要なのは、人それぞれが、確固たる職業観、勤労観をもち、自己の責任で「キャリア」を選択、決定することができる能力や態度を身に付けることである。

「キャリア教育」については、先述の「報告書」では、以下のように定義している。

「キャリア教育」の定義

「『キャリア』概念に基づき、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」、端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義する。

また、愛知県産業教育審議会答申「新しい時代に対応したキャリア教育の在り方について」では、

将来の生き方や社会人、職業人としての在り方を考えさせ、望ましい勤労観・職業観や、社会に貢献していく態度と時代の変化に適切に対応できる基礎的・基本的な資質と能力を育成する教育

と定義している。

つまり、自らのキャリアを活用し、自己の現在や将来を見据える基礎・基本となる能力をはぐくむ能力のことである。

3 キャリア教育の方向

キャリア教育を推進する上で最も重要なことは、児童生徒一人一人のキャリア発達をきめ細かく支

援していくことである。そのためには、児童生徒のキャリア発達の状況を的確にとらえることが必要になる。日常の活動の様子や成果等を観察し、ポートフォリオ（*）等を活用し継続的・統合的にデータを蓄積し、教員だけでなく児童生徒も自己の発達を評価し、確認できるようにすることが求められる。

また、「働くこと」への関心・意欲の高揚と学習意欲の向上を目指すことも、同様に重要である。キャリア教育を短絡的に就職に結び付け、教科の学習と相対立するものであるという誤解がまだあるようであるが、実は、キャリアに関する学習は、教科の学習や主体的に学ぼうとする意欲の向上に結びつき、教科の学習はキャリアに関する学習への関心・意欲につながる、相互補完的な関係にあることを理解する必要がある。

さらに、キャリア教育は、児童生徒を一人の職業人としてとらえ、その資質・能力を高める教育活動ともとらえることができる。学校での教育において、基礎・基本の学習を徹底し、将来の専門的な知識や技能を習得する素地をつくることが大切である。そして、自立意識の涵養と豊かな人間性の育成へとつなげることが大切である。

（* ポートフォリオ：児童生徒の学習成果を継続的に蓄積したもの）

4 キャリア教育推進の取組

「キャリア教育」という文言が、文部科学省関連の審議会報告等で初めて登場したのは、平成 11 年 12 月の「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」であった。そこでは、学校教育における接続の改善を図るには、小学校段階から発達段階に応じて「キャリア教育」を実施する必要があると提言されている。

その後、平成 14 年 11 月には、国立教育政策研究所の「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（調査研究報告書）で、また、平成 16 年 1 月には文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」において、キャリア教育導入の経緯、「勤労観、職業観」の定義、キャリア教育導入の意義等についてまとめながら、我が国におけるキャリア教育の推進のための方策を提言している。

平成 17 年 11 月には、文部科学省は「中学校 職場体験ガイド」の中で、同年から実施された「キャリア・スタート・ウィーク」に代表される、中学校でのキャリア教育の中核である職場体験を通じた学習活動の一層の推進を図り、学校だけでなく、受入企業や家庭等での理解と協力を求めている。

さらに、平成 18 年 11 月、文部科学省は「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引 ー 児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるためにー」を作成し、先の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」の内容をより分かりやすく解説し、キャリア教育推進への取組をより積極的に行うことができるように、発達段階を重視した取組例を提示したり、教科の授業でのキャリア教育の実践例を掲載したりして、各学校段階におけるキャリア教育をより一層推進することを求めている。

なお、キャリア教育に関する報告書や施策が、文部科学省からだけではなく、他省庁からも提出されている。（表 1）

【表 1】

年 月	キャリア教育に関する報告書・施策等
H11. 12	「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」 (中央教育審議会)
H14. 11	「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)」 (国立教育政策研究所)
H16. 1	「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議(報告書)」 (文部科学省)
2	「専門高校等における『日本版デュアルシステム』の推進に向けて」 (専門高校等における「日本版デュアルシステム」に関する調査研究協力者会議)
6	「若者自立・挑戦プランの更なる強化」 (文部科学大臣, 厚生労働大臣, 経済産業大臣, 経済財政政策担当大臣, 内閣官房長官)
12	「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」 (文部科学大臣, 厚生労働大臣, 経済産業大臣, 経済財政政策担当大臣, 内閣官房長官)
H17. 9	「若者の人間力を高めるための国民宣言」 (若者の人間力を高めるための国民会議)
10	「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」の強化 (文部科学大臣, 厚生労働大臣, 経済産業大臣, 経済財政政策担当大臣, 内閣官房長官)
11	「キャリア・スタート・ウィーク・キャンペーン」開始 「中学校 職場体験ガイド」 (文部科学省)
H18. 1	「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン(改訂版)」 (文部科学大臣, 厚生労働大臣, 経済産業大臣, 経済財政政策担当大臣, 内閣官房長官)
11	「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引」 (文部科学省)
11	「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議(報告書)」 (文部科学省)
12	教育基本法の改正
H19. 3	「職場体験・インターンシップに関する調査研究 報告書」 (国立教育政策研究所)
4	「再チャレンジ支援」 (再チャレンジ推進会議)
5	「キャリア教育等推進プラン」 (内閣府)
6	「社会総がかりで教育再生を 第二次報告」 (教育再生会議) 学校教育法等の改正

5 当センターの取組

当センターでは平成17年度から平成19年度の3年間で「キャリア教育推進に関する調査研究」を実施した。

(1) 平成17年度

研究の目標として、フリーター、ニートに象徴される若者の精神的、社会的自立の遅れや就業意識の低下の原因を探り、生徒の「生きる力」の育成を、中・高等学校を中心に学校教育の活動全体からとらえ直しを図るとともに、「キャリア教育」についての教員の意識改革と資質の向上及び各学校における取組の振興・充実を図ることを設定し、以下のような研究を実施した。

ア キャリア教育導入の経緯と意義についての文献調査

「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」（国立教育政策研究所）及び「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（文部科学省）におけるキャリア教育推進に関する提言を整理し、キャリア教育導入の経緯、「勤労観、職業観」の定義、キャリア教育導入の意義等についてまとめた。

イ 学習プログラム枠の検討

キャリア教育にかかわる先進的な取組例や県内の中・高等学校生徒の生活・意識の変容、勤労観、職業観の把握等を通して、キャリア教育の在り方と推進のための方策を検討し、児童生徒の実態に即した学習プログラムの開発と各学校における取組を推進するための資料等を提供することに着手した。

ウ アンケートの作成

県内の児童生徒の生活・意識の変容、勤労観、職業観の把握等及び教員のキャリア教育に対する意識等を調査するために、どのようなアンケート項目が必要かを検討した。

(2) 平成18年度

前年度の研究を基に、以下のような研究を実施した。

ア 学習プログラムの開発

「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」（国立教育政策研究所）の「職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）」で示された、小・中・高等学校の各段階で育成すべき具体的な能力・態度を念頭に、学習プログラムの開発に取り組み、既に各学校で実施している教育活動全体を、キャリア教育の観点で見直し、活動全体を有機的に関連付けることを意識して取り組んだ。

イ キャリア教育に対する教員の意識（アンケート結果概要報告）

愛知県における市町村立小学校、中学校及び県立高等学校の教員のキャリア教育に対する意識と各学校における取組状況を調査し、今後の「キャリア教育推進に関する調査研究」の基礎的な資料を作成する目的でアンケートを実施した。

ウ キャリア教育実践事例

小・中・高等学校における先進的な取組を報告した。地域や児童生徒の実態等を踏まえ、各校の創意工夫に基づいた実践を取り上げ、各学校の参考となる資料を提供した。

以上の研究から次のことが明らかになった。

- 小学校での取組が少ない。
- 高等学校、特に普通科におけるキャリア教育への取組が少ない。
- 職業体験等に関して、中・高等学校で事前・事後指導の時間の確保や受入先（事業所）の開拓などに苦勞している。

- 小・中高等学校で、教員の意識が低い、温度差がある。
- 小・中高等学校で、教員の果たすべき役割が明確でない。
- 小・中高等学校で、様々な教育活動がキャリア教育に関連していることを認識していない。

(3) 平成 19 年度

これまでの調査研究の結果、上記のような課題が明らかになったので、今年度は、各学校でキャリア教育を実践する上での参考となるものを提供するために、以下のような視点から、更に研究・開発を進めた。

ア 学校間の連携の方法を探る。

平成 18 年度に実施した当研究の「キャリア教育の推進に関するアンケート」によると、「キャリア教育の実施に当たり、小・中・高等学校の系統的な連携が必要であると思いますか」という質問に対して、81.8%が「必要」と回答し、各学校段階で、どのようなキャリア教育に関する活動を行っているかを知った上で、自校のキャリア教育を推進すれば、より一層効果のある実践に取り組むことができるという認識をもっている。しかしながら、「連携のよさは分かるが、何をどうすればよいのか分からない」「連携する時間的なゆとりがない」等の原因で、学校間の連携が取れていないのが現状である。したがって、その解決策として、学校間連携の具体的な手段と実践について研究した。

イ 校内研修で教員の意識を高める方法を探る。

キャリア教育に関する教員の意識を向上させるために、校内研修で活用できる方法を研究した。具体的には、キャリア教育を支援する情報集の提供、キャリアカウンセリング、児童生徒のコミュニケーション能力の向上を目指す手法や、授業場面における「4 領域・8 能力」の育成を念頭に置いた授業指導演の作成等を検討した。

ウ 各校種での取組の成果・課題を調べる。

各学校でのキャリア教育推進のための参考として、小・中・高等学校での創意工夫に基づいた実践例を取り上げ、その成果と課題を明らかにする研究に取り組んだ。

小学校での日々の取組をキャリア教育の視点からとらえ直して、キャリア発達にかかわる四つの領域の能力が様々な場面で育まれることを確認し、その中でも特に「人間関係形成能力」を付けることを目指し、その手だてとして、「コミュニケーション力の育成」と「自己肯定感の育て方」に重点を置いた指導を展開した実践を取り上げた。

中学校の例として、経済産業省・文部科学省・厚生労働省が連携した「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」を活用し、商工会議所のコーディネートの下、市内小・中学校と地元産業界が連携し合ってこのプロジェクトに参加した例を取り上げた。

また、高等学校の例として、進路指導部による学年別進路指導、1 年次の「産業社会と人間」、2 年次・3 年次の「総合的な学習の時間」を通して、将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深める学習や生徒の興味・関心、個性を生かした科目選択（指導）や主体的な学習を重視するとともに、社会体験学習（インターンシップや実習体験）、ボランティア活動、地域貢献活動を広く生徒に奨励し、普段のあらゆる学校行事や教育活動を通して、キャリア教育の推進を図る学校の実践を取り上げた。

エ 高等学校普通科でのキャリア教育の推進の方法を探る。

平成 18 年度に実施した当研究の「キャリア教育の推進に関するアンケート」によると、高等学校普通科では、キャリア教育の取組の必要性に関して、どの調査項目に対しても肯定的な回答の「必要である」と「どちらかと言えば必要である」を足した数値は 70%を超えている。つまり、キャリア

教育の意義・必要性は認識しているが、その取組が不十分であるというのが現状である。

このような認識の基づき、高等学校普通科で、生徒が将来における社会参加を視野に入れ、大学進学の意味を理解し、目的をもって様々な活動に取り組むことができるよう、キャリア教育を一層推進・充実させるための方策を提案した。

6 現状の再考と今後の課題

キャリア教育に関する様々な資料が作成、開発され、各学校のキャリア教育指導計画や実践例がホームページへ公開されている状況の下で、キャリア教育を実践している学校では、その手ごたえを感じ取っている。中学校では「キャリア・スタート・ウィーク」の導入で、社会とかかわる活動を通して、生徒の変容が実感されている。学校において、キャリア教育への実践意欲があれば、これらの資料を活用したその学校独自の取組を、十分に展開することが可能な状況である。

しかしながら、キャリア教育という言葉自体は、まだ十分現場の教員には腑に落ちていないようである。キャリア教育の重要性は、学校が感じている他の喫緊の教育課題と比較すると、相対的に低い位置にあるととらえられている。また、上越教育大学大学院の三村隆男准教授の「キャリア教育は新しい教育ではない。既に行っている授業や教育活動をキャリア教育という視点で実践すればよい」という解説は、「従来の活動を新しいねらいで実践する」という趣旨であるが、実際には、キャリア教育のもつ新しさが理解されず、キャリア教育という視点をもつことなく、従来の教育活動が繰り返されているようである。

したがって、ここで改めて、今日までのキャリア教育の意義、実践の成果等を検証し、キャリア教育が今一步浸透していない現状を打開すべく、解決すべき課題等を明らかにして、キャリア教育のためのカリキュラムや指導方法の開発や評価方法等の在り方を検討することが必要であろう。

参考文献

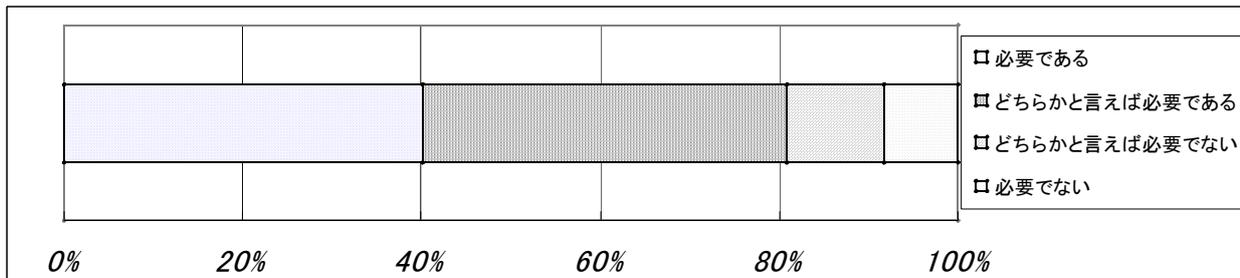
三村隆男（2004年）「はじめる小学校キャリア教育」実業之日本社

学校間連携について

1 教員の意識と連携の必要性

平成18年度に「キャリア教育の推進に関するアンケート」を県内の小学校24校、中学校16校、高等学校21校の計61校を対象に行った。その37項目あるアンケートの中の「キャリア教育の実施に当たり、小学校・中学校・高等学校の系統的な連携が必要であると思いますか」という質問に対して、81.8%が「必要」と考えていることが分かった（資料1）。その数字の高さから、学校間連携の利点を具体的に考えていくことが必要であることが分かった。

【資料1】



その理由として以下の3点が考えられる。

①小・中・高等学校の一貫した指導内容・方法に取り組むことが、キャリア教育を進める中でとても重要となってくる。小・中学校においては、共通の課題を設定し取り組むことなど、連続した9年間の児童生徒の育ちを見通したキャリア教育を実践するに当たり、小学校で取り組んできたことを知ることができれば、中学校や高等学校で更にレベルの高い実践が行える利点が考えられる。

②キャリア教育においては児童生徒一人一人の目標は異なるため、個に応じた指導の必要性は大きい。今までにその児童生徒が受けてきたキャリア教育の内容を知ることで、その児童生徒のキャリア発達に対する理解を深めることができる。そのため、各教員がその児童生徒の小学校1年時から現在に至るまで、どのような活動を行い、体験を積み、考えを深めてきたかについての情報収集は必要不可欠であると考えられる。

③キャリア教育においては、各校種間で同じ内容の学習を行っているケースがよく見られる。例えば、職場体験学習は、現在多くの中学校や高等学校において実施されていて、その目的や内容について、大きな違いはないようである。中学校や高等学校の教員が職場体験学習の情報交換を行うことで、指導の重複を防止したり、より高い目標を設定したりすることも可能になる。各校種間でキャリア教育の実施内容の情報交換を行うことで、より円滑に、かつ、効果的に指導できるようになると考える。

このような利点があるにもかかわらず、連携ができていない学校がほとんどである。その原因として考えられることは、

連携のよさは分かるが、何をどうすればよいのか分からない
連携しなくても何とかやっていける
連携する時間的なゆとりがない

などである。

次に、その解決策として、連携の具体的な手段と実践例について提案したいと思う。

2 解決策〈具体的な手段と実践例〉

(1) 学習プログラムの活用

キャリア教育は生涯におけるキャリア発達を促すものであることから、小学1年生から高校3年生までの系統立てた学習プログラムの開発とその活用が必要である。昨年度、当研究会で職業観・勤労観を育むことを目的とした学習プログラムを作成した。各校種において教育課程とキャリア形成にかかわる活動を関連付けて、学習プログラムに基づいて指導を進めていくことが連携の第一歩であるとする。小学校での学習プログラムを確実に定着させていけば、中学校では、その次の段階として、学習プログラムに沿って指導をしていけばよいことになるからである。そのため、作成するに当たって、小・中・高等学校の連続性や一貫性に配慮できるとよい。さらに、それぞれの学習プログラムについて、情報交換ができるとより効果的ではあるが、できなくても、その学校での学習プログラムを徹底していくことで連携の基盤がつけられると考える。

(2) カルテ方式の導入

児童生徒のキャリア発達を系統的に促すためには、児童生徒一人一人を理解し、その児童生徒が受けてきた学習領域や内容、培ってきた能力の様子を知ること、効果的な指導をすることができる。そのためには「カルテ」(P.16参照)の活用が有効である。「カルテ」はその児童生徒の様々な情報が記述される。記入には手間が掛かると考えられるが、継続して取り組むことで効果を発揮するので、時間を惜しまずに作成し、活用したい。近隣の小学校が領域や能力について同じ形式で評価することができれば、中学校が利用しやすいと考えられる。

また、キャリア教育の授業で使用したワークシートや各活動における感想文などをポートフォリオとして蓄積されたものを活用することも考えられる。改めて評価したり、時間をかけて記入する手間が省かれるため利用しやすい。ただし、学校ごとに取り組む内容が異なる可能性があるため、どの能力が身に付いているのかについては、多くの資料に目を通す必要があり、かなりの時間を必要とする。

なお、「電子カルテ」(資料2)を活用した先進的な取組をしている学校もあるので、ここに紹介する。

【資料2】

The screenshot displays the E-School Version V0.41 software interface. The main window shows a calendar for December 2005, with the date 12/13 (Tuesday) selected. The interface is divided into several sections:

- Left Panel:** Contains a list of messages and announcements, including one about a school event on 12/13.
- Top Center:** Displays the current date and time: 2005/12/13 (火).
- Center Panel:** Shows administrative data such as '出席状況' (Attendance Status), 'クラス写真' (Class Photos), and '職員会' (Staff Meeting). It also includes a '管理当番' (Management Duty) table for the current date.
- Right Panel:** Features a '行事予定' (Event Schedule) table with columns for date, time, and event name. It lists various school activities and meetings.
- Bottom Panel:** Contains a '未読メール' (Unread Emails) section and a 'あゆみ' (Progress) table with columns for date, time, and activity.

The interface is designed for school administrators to manage daily operations, track events, and monitor student progress.

【例】電子カルテの活用により子供一人一人の6年間の育ちを全職員で促す教育体制の構築

西尾市立西尾小学校では、「児童一人一人の把握，指導，評価にカルテがとても有効である」と考え、教育補助員が開発した，児童の様子等を記録する電子カルテを活用している。

この電子カルテは，高い安全性と事務の効率化を図り，「連絡関係」「児童名簿の管理」「設備備品管理」「成績処理」「会計処理」の校務も含めた総合的な教育支援ソフトウェアである。安全対策については，通常の安全対策の上に，システムソフトとデータを分離しているため，万一システムソフトをインストールしたコンピュータを紛失した場合でもデータ流出のおそれがない。また，事務の効率化については，一つのデータが関係書類のすべてに反映されるようになっているので，例えば，「出席簿」に入力すれば，「本日の欠席状況」「学校日誌」「保健日誌」「個別欠席集計表」「通知表」にもそのデータが反映される。

電子カルテにより，すべての教職員が，日常的教育実践の中で，はっとした『この子』の現象を入力・累積し，その情報を相互に共有・解釈・交流することで，『この子』についての理解の幅が広がり，深さが一層増し，ひいては，『この子』の行動特性が解明できる。この行動特性にかかわる情報を共有し，全職員で実践を積んでいけば，子供一人一人の成長を見守ることができると考えられる。つまり，電子カルテの活用により，子供一人一人の6年間の育ちを全職員で促す教育体制の構築ができると言える。

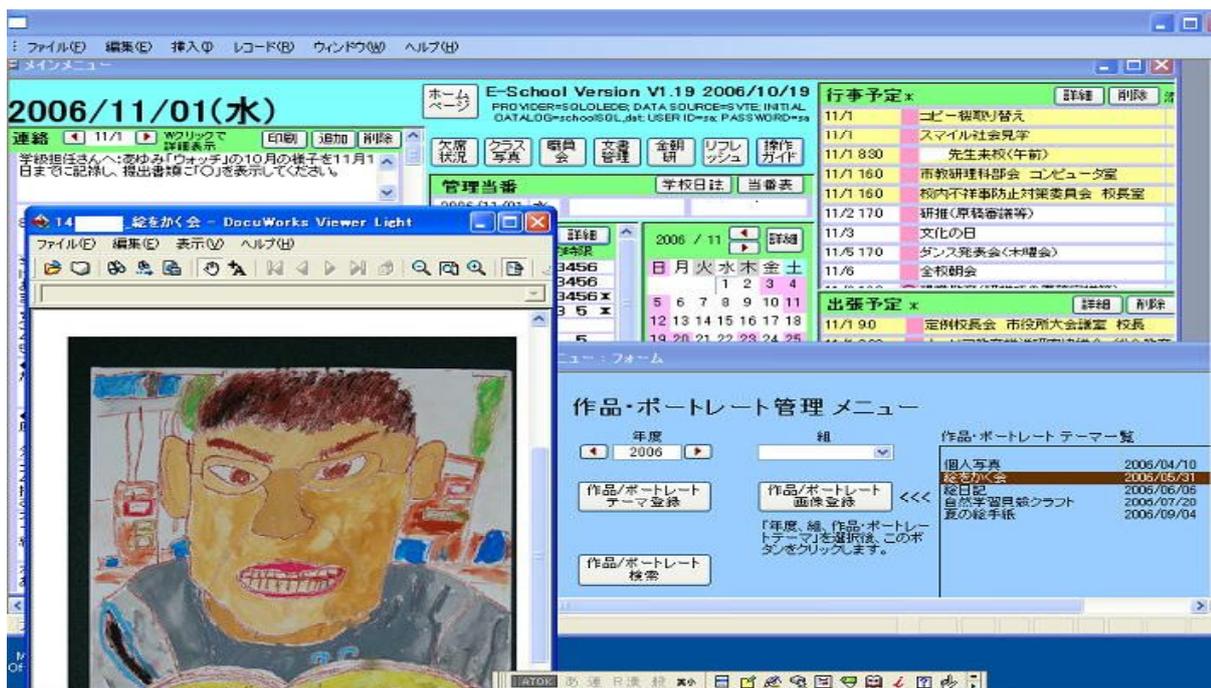
電子カルテの活用之际，大きくかかわった情報源は，保健室の養護教諭である。電子式「保健・執務日誌」（資料3）に記入する情報が，リアルタイムで職員に公開されるので，保健室の情報を学級担任が容易につかむことができる。また，養護教諭は，電子カルテの活用により保健室以外の情報を入手でき，その情報も含めて児童と接することができる。現在では，養護教諭が中心となり「この子」についての現れを総合的に分析し，作成した資料を基に，全職員で「この子」を理解し支援していくための会議を行っている。

【資料3】

平成18年度からは画像処理ソフトを活用して，画像情報を記録できるようになった。子供一人一人の絵画や作品，作文等を映像データとして保存を始めた（資料4）。これを6年間続けていけば，「この子」の成長を映像データからも読み取ることができる。電子カルテによって，単に職員がリアルタ

イムに情報交換ができるというレベルから、職員同士の情報の交流が生まれ、子供一人一人に応じた支援が全職員でできるという高いレベルの教員集団となりつつある。

【資料4】



(3) 情報交換会及び授業参観

高等学校での授業公開に参加することにより、その学校の指導方針や雰囲気、生徒の生の姿を見ることができ、特に、他校種での授業公開では、日ごろかかわりの少ない異校種間の共通理解を進めることができ、大変貴重な行事であると言える。

田原市立福江中学校では、近隣の高等学校で授業公開等が開催される時は極力参加するようにしている。今年度も地元県立高等学校の普通科福祉実践コースの授業公開と情報交換が行われ、2名の教員が参加した。中学校の教員は福祉実践コースの内容をパンフレットや学校説明会などで知識として持っているが、実際にその授業や生徒の様子を見る機会はほとんどないため、福祉実践コースの特徴をイメージとしてとらえることがなかなかできない。そのような状況の中で、授業公開に参加することは、実際に授業を見ることができ大変有意義な機会である。

授業参観では、3年生のクラスを「調理」と「基礎介護」の二つに分けて授業が公開された。

「調理」…3年で履修し、日常食に対応したメニュー作り、調理の基礎知識を学び、調理技術を習得することを目的としている。

「基礎介護」…2・3年で履修し、介護の在り方や心構えなどを学ぶことを目的としている。

どちらの授業も男女共に真剣に調理や介護に取り組む姿が見られた。福江中学校の卒業生も何人か活動しており、真剣な態度で実習に取り組んでおり、目的意識をもって高校生活を送っているその姿に、卒業後の成長を実感することができた。

情報交換の時間では、福祉実践コースにおける目的、学習内容、取得可能な資格、進路の実際などが情報提供された。



「調理」に参観する中学校教諭

目的 …「高齢化社会における福祉実践の具体的な方法を学習するとともに、人を思いやる心や精神を育成すること」

学習内容…「家庭介護・福祉」「基礎介護」「被服製作」「社会福祉実習」「福祉情報処理」「調理」

資格 …「訪問介護員2級」「訪問介護員3級」

進路 …「福祉関連施設へ就職」「福祉関係の専門学校」「福祉関係の短大・大学」

この他にも、福祉実践コースに進学する生徒の適性や心構えを聞くことができた。また、現在の生徒の実態や高校の様子をよりよく知ることもできた。

参加した教員は以下のような感想をもった。

福祉実践コースは大変実践的な学習をしており、福祉への気持ちを強くもった生徒を進学させることが必要だと感じた。今日の参観授業で、高校生の真剣な姿を見て、中学生時代から自分の生き方を考えられる生徒を育てていきたい。

(4) 講師を招いての学習会

キャリア教育実施上の課題の一つに、教員のキャリア教育に対する意識の低さが挙げられる。また、校種によっても意識の差が出ている。そこで、教員を対象とする研修会を様々な場において実施していく必要がある。キャリア教育に造詣ぞうけいの深い講師を招いての学習会は研修の第一歩として効果的である。ここでは、「福江中学校区小中交流事業」で行われたキャリア教育の研修会についてその概略を述べる。

福江中学校区には一つの中学校と四つの小学校がある。その研修では福江中学校に四つの小学校の教員が集まり、中学校の授業参観とキャリア教育に関する講演会を行った。

授業参観では、1年生3クラスは学級活動「命の授業」、2年生は選択教科の授業、3年生は必修教科の授業を公開し、様々な教科の多様な形態の授業を観察できた。

講演会では、愛知教育大学教授神谷孝男先生の「小中連携によるキャリア教育・進路指導を」と題して講演があった。内容については以下のとおり。



「命の授業」を参観する小学校教諭

—— 「キャリア教育の基本的な考え方」神谷先生の講演より ——

青少年が生涯にわたって「よりよい生き方」を実現していくためには「健康と体力」が必要不可欠である。キャリア教育は、健康の保持・増進と体力の向上を図ることを目指して、家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、学校ごとに目標を設定して、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある。

小学校段階におけるキャリア教育は、児童一人一人にキャリア教育の中で育てる資質や能力の土台づくりを目指すものである。「健康・体力の増進と保持」「基本的な生活習慣」「良好な人間関係」などを考えていくことが必要である。その上で、自分の言葉で夢（「こんな人間になりたい」「こんなことをしたい」「こんな生活をしたい」）を語れる子供を育てていきたい。

参加者からは「小学校段階からキャリア教育のねらいを考えながら授業に取り組んでいくことが大切であると知った」「しつけや体力づくりなどをしっかりやるのがキャリア教育のねらいを達成す

ることにつながるとは知らなかった」「早寝・早起き・朝ごはんを小学校3年生からでもやっていき、中学校のキャリア教育につなげたい」などの声が聞かれた。

(5) 学校間交流

ア 小学校－中学校の連携

三好町立三吉小学校では「先輩の話を聞く会」を開催している。この会の目的は、それによって、不安や心配が取り除かれ、希望をもって中学校へ進学することをねらいとしている。小学生が去年まで一緒に小学校生活を送っていた現中学一年生の話を聞くことは、説得力があり印象に残ると思われる。

あらかじめ、中学校へ「先輩の話を聞く会」の趣旨と日程などを知らせ、来てもらう生徒の選定をお願いする。2週間前には、子供からの質問をまとめたものを送り、当日話してもらうことを決めておいてもらう。話題は、主に小学校と中学校の生活の違い、部活動について、テストについて、授業についてなどが中心となり、「(自分の入りたい部活名を挙げて)初めてでもできるのか」「英語の授業について、習っていないけどついていけるのか」



「先輩の話を聞く会」の様子

「怖い先輩がいると聞いているが、実際はどうか」など具体的なことをたくさん聞くことができた。事後の指導として、参加してもらった中学校の生徒あてにお礼の手紙を書いた。

初めての試みであったが、子供達は「中学校へ行くのが心配だったけど、今日の話聞いて少し心配が減った」「入りたい部活を決めていなかったけど、入学してから体験できる日があることを知って安心した」など、先輩から話を聞くことができたことでとても安心できたようである。また、保護者も何人か参加してくださり「初めての子供なので、とても心配していましたが、今日の話が聞いて少しだけ安心した」等と感想を述べていた。

全体としては、心配を取り除けるといふ大きな成果があったので、今後も継続して行い、多くの子供に中学校生活に希望をもってほしいと考えている。

イ 中学校－高等学校の連携

学校間交流の中では、中学校と高等学校の交流は比較的活発に行われていると言える。中学生を対象にした高等学校の体験入学や学校説明会は、数多く行われている。また、中学校に卒業生を招いて、高等学校の情報や進学に必要な心構えなどを聞く会もよく行われている。

田原市立福江中学校では、夏休みを利用して高校の教員と現役の高校生を招き、渥美文化会館で中学3年生と保護者を対象に「進路学習会」を開催している。話をしてもらう高校は以下の5校である。

福江高校（普通科・福祉実践コース） 成章高校（普通科・商業科・生活文化科）
渥美農業高校（農業科・施設園芸科・生活科学科） 時習館高校（普通科）
豊橋南高校（普通科・生活デザイン科）

進路学習会は2部構成となっており、1部では全体で「講話会」を、2部では各高校各学科の代表者1名から3名が分科会形式で「先輩と語る会」を行う。

1部では、「高校生の学習と生活・そして高校進学までに付けておきたい能力」について話を聞いて

た。この際、講話を行う教員は、高校の説明にならないように、高校教育が目指していることや、今（中3の夏から来春）すべきことを中心に話した。次に近隣の各高校から代表となる生徒1名ずつが高校の紹介を行い、校風や学科の特色、部活動などを概括的に発表した。

2部では10分科会に分かれ、高校生がより詳しい学科の特色や現役高校生ならではの生の情報を伝えた。分科会は前半と後半の2回設定し、一人で2分科会に参加できるようにし、希望する保護者の参加も認めた。中学生からは、時間割、学費、校則、校訓、部活動の練習内容などから、高校に入っ**て**びっくりしたこと、困ったこと、うれしかったこと、受験生としての心構えなど積極的に質問がなされ、どの高校生も自分の知る範囲で一生懸命答えていた。

高校生にとっては自分の学校のよさを見直す場となる。発表に当たっては、分かりやすく話す、伝える力が必要となる。あらかじめ話すことを決め、準備を万全にして臨む説明の場と、質問を受け臨機応変に分かりやすく答える場がある。このように参加した高校生にとって人間関係形成能力や情報収集能力を伸ばす場となった。

この会の後、次のような声が聞かれた。

「高校生にしか分からないような細かい情報まで聞けて参考になった。希望校に入りたい気持ちが強くなった」(中3男)

「緊張したけど、分かりやすく礼儀正しい言葉で話せた。高校のことも再認識できた」(高3男)

「中学生も高校生も真剣に会に参加していた。高校の先生から具体的な話が聞けてよかった」

(保護者)

ウ 小学校－高等学校の連携（その1）

県立渥美農業高等学校では「渥農ふれあいアグリ体験講座」を開催している。この講座は平成18年6月から始まった、高校生が小学校・幼稚園・保育園の児童や園児を対象に行う農業体験講座である。内容は、うね作りや種芋の植え付け等のサツマイモ栽培、動物との触れ合い体験、花苗の植え付け体験などである。

これらの活動は、高校生が小学生や保育園児らに農業関係の作業を教えることを基本としている。高校生は自分たちが学習したことを咀嚼し、小学生などに分かりやすい言葉で、責任をもって農業の基本的な事柄を教えて

いく。小学生にとっては、普段なじみの少ない農作業や家畜との触れ合いを体験できる。ここでは、高校生には自己有用感を、小学生には農業をじかに感じられるという効果がある。

この事業を通して、以下のような成果があったと考えられる。

小学校

- ・農村地帯の学校でありながら児童の農業体験は不足している中で、地元の産業に目を向けるきっかけとなった。
- ・高校生との触れ合い、特に会話を通してコミュニケーション能力を高めることができた。
- ・「農業高校に進学したい」など将来の進路に対する考えが芽生え始めた。



サツマイモ掘り

高等学校

- ・異世代との交流を通して、社会的なマナーやルール、他人を理解・配慮する態度が身に付くとともに、コミュニケーション能力が養成され、精神面の成長及び学習意欲の高揚が促された。
- ・体験学習や交流を通し、幼稚園及び小学校におけるキャリア教育の推進に役立てた。

エ 小学校－高等学校の連携（その2）

県立鶴城丘高等学校では、昨年度、西尾商工会議所の創立50周年に先立ち開催された産業活性化展において、3年生が中心となって、サッカーロボットの製作を通して、参加した小学生にもものづくりの楽しさを伝えた。

また、地域の小学生が高等学校を訪問して、芋掘り体験や学校で飼育している動物の絵を描いたり、高校生が小学校に行き、そこで飼育されている羊などの動物の世話の仕方などを教えたりすることもある。



「サッカーロボット製作」の様子

(6) 学校のホームページでの情報公開

現在、多くの学校でホームページが開設され、教育目標や学校行事、特色ある取組などについて様々な形で公開されている。キャリア教育のように校種間の連携が不可欠な内容については積極的にホームページに掲載することが望ましい。校種を超えてキャリア教育の取組を知るにはホームページの活用は有効である。近隣の学校が行っているキャリア教育の取組や、同じ校種の学校がどのような取組をしているのかを知ることで、自分たちの活動の幅を広げたり、内容を深めることができる。そのためには、各学校が自校のホームページに【キャリア教育】のコーナーを設けて、キャリア教育についての情報を公開することから始めていただきたい。

- | | |
|--------------|---|
| ・三好町立三吉小学校 | http://www.hm.aitai.ne.jp/^miyoshi |
| ・田原市立福江中学校 | http://www.city.tahara.aichi.jp/school/fukue-j |
| ・愛知県立鶴城丘高等学校 | http://www.kakujogaoka-h.aichi-c.ed.jp |

3 まとめ

以上具体的な連携について述べてきた。

それぞれの学校でキャリア教育を推進する際、より効果的な指導をしたいとだれもが考えるであろう。その出発点は学校間連携にあると思われる。学校間連携は、まず、お互いの学校について知ることから始まると考えられる。それぞれの学校で取り組んでいること、重点的に指導していることなどを知ることが第一歩である。

今後できるだけ多くの学校がキャリア教育に積極的に取り組み、具体的な実践例に関する情報や資料を発信したり、交換したりすることによって、児童生徒が望ましい勤労観・職業観を身に付けることを期待している。

キャリアカルテ 名前【 】

領域	能力	小学校 1年 組 番	小学校 2年 組 番	小学校 3年 組 番	小学校 4年 組 番	小学校 5年 組 番	小学校 6年 組 番	中学校 1年 組 番	中学校 2年 組 番	中学校 3年 組 番
人間関係形成	【自他の理解能力】									
	【コミュニケーション能力】									
情報活用能力	【情報収集・探索能力】									
	【職業理解能力】									
将来設計能力	【役割把握・認識能力】									
	【計画実行能力】									
意志決定能力	【選択能力】									
	【課題解決能力】									
・キャリア教育に関する取組										
備考										

・進んであいさつができる。
 ・自分の考えをみんなの前で話すことが苦手。
 など、各観点で優れているもの、苦手として
 いることが顕著なものについて記述する。すべ
 ての観点を埋める必要はない。また、空欄は普
 通に「できる」ことを示すものとする。

・給食のおばさんに感謝する会(生活科)
 ・はきはきあいさつ(国語)
 ・係決め(学活)
 など具体的に取り組んだことについて、主だ
 たものを記述する。

校内教員研修のために

1 はじめに

近年の産業界の構造的変化や雇用の多様化・流動化等を背景として、児童生徒の進路に関する環境は大きく変化している。そこで、児童生徒が「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されず、諸課題に柔軟に、かつ、たくましく対応し、社会人として自立していくことができるように、学校ではキャリア教育が強く求められていくことは言うまでもない。

実際に、キャリア教育の重要性を感じて、その実践に取り組もうとする学校も少なくないが、推進する上での様々な困難が生じている。中でも、一番の困難は「全教員が意義を理解し、同じ目線で指導が展開できるか」という、教員の理解と協力に関することである。キャリア教育を推進する上で、教員一人一人の十分な理解と認識を確立することは不可欠である。

その手段として、各種の研修に参加することが有効である。そうした研修を積み重ねながら、児童生徒の発達や環境の変化等についての的確に認識し、キャリア教育の実践に必要な知識や指導方法を体得していくことが求められている。児童生徒から離れて、校外の研修に参加することも考えられるが、様々な面で負担が大きくなるので、ここでは、校内で実施できる研修について考える。

2 インターネット上の情報活用

現在では、インターネット上に、キャリア教育推進を支援する良質な情報が豊富にある。キャリア教育に関する研修を支援するサイトやツール、児童生徒が「4領域8能力」を身に付けることを支援するサイトやツール等を活用し、校内研修で教員間の共通理解を図ることができるので、ここに紹介する（資料1）。

【資料1】

キャリア教育に関する校内研修を支援するサイトやツールの一覧

キャリア教育を学ぶため

講話を聴く

キャリア教育研修に関する講義 (独立行政法人教員研修センター)

<http://sweb.nctd.go.jp/jirei.html>

キャリア教育を推進するための指導者の養成を目的とした研修に関する講義の動画を提供。平成16年度～平成18年度筑波大学で行われたキャリア教育を推進するための指導者の養成を目的とした研修～基礎コース～を集録したもの。キャリア教育推進フォーラムにおける基調講演や発表についても集録されている。文部科学省初等中等教育局児童生徒課宮下和己生徒指導調査官「キャリア教育の現状と課題」、東北大学菊池武剋教授「小学生・中学生・高校生の心理的・社会的発達と自己理解」などの講義多数。

資料から学ぶ

キャリア教育推進に関する調査研究（中間報告） (愛知県総合教育センター)

<http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/kyariakyouiku/kyariaindex.htm>

研究の内容

<p>(1) キャリア教育の推進に向けて</p> <p>(2) キャリア教育に関するアンケート 愛知県における市町村立小学校、中学校及び県立高等学校の教員のキャリア教育に対する意識と各学校における取組の現状を調査して、今後の「キャリア教育推進に関する調査研究」の基礎的な資料を作成する目的でアンケートを実施した。</p> <p>(3) 学習プログラム枠の開発 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」（平成 14 年 11 月 国立教育政策研究所生徒指導研究センター）の「職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）」において、小・中・高等学校の各段階で育成すべき具体的な能力・態度が示された。これらの能力・態度の育成を目指す学習プログラムの開発に当たり、既に各学校で実施している教育活動全体を、キャリア教育の観点で見直し、活動全体を有機的に関連付けることを意識して取り組んだ。</p> <p>(4) キャリア教育実践例</p>
--

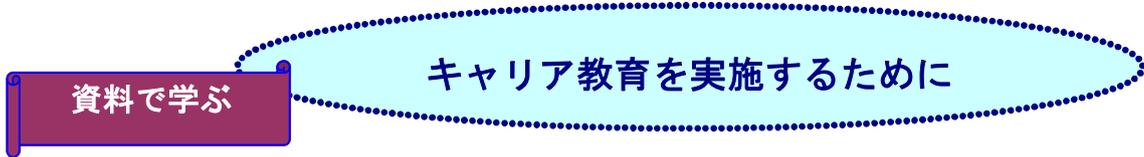
<p>「キャリア教育」資料集 －文部科学省・国立教育政策研究所－研究・報告書・手引編 （国立教育政策研究所生徒指導研究センター）</p>
<p>http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/i-s/siryosyu-zoho.pdf</p>
<p>「キャリア教育」が文部科学行政関連の審議会報告等で、文言として初めて登場した中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（平成 11 年 12 月）から、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」平成 14 年 11 月、「キャリア教育に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）」平成 16 年 1 月など、文部科学省、国立教育政策研究所等から出された主な研究報告書、手引、資料等を整理。</p>

<p>みやぎキャリア教育プラン （宮城県教育研修センター）</p>
<p>http://midori.edu-c.pref.miyagi.jp/career/index.html</p>
<p>キャリア教育の理解、キャリア教育Q&A、小・中・高校内研修資料、指導案・ワークシートなど。小・中・高等学校の 12 年間を通しての資料が提供されている。</p>

<p>「生きる力」を育むキャリア教育－小学校における理解と実践のためのQ&A－ （栃木県総合教育センター）</p>
<p>http://www.tochigi-c.ed.jp/curriculum/cyosakenkyu/career-h18/h18career_syou.htm</p>
<p>小学校におけるキャリア教育についての理解と各学校における実践を支援するために作成されている。第 1 章「キャリア教育について理解しましょう」、第 2 章「キャリア教育を実践しましょう」、第 3 章「学校全体で取り組みましょう」で構成されている。ワークシートあり。</p>

<p>埼玉県小・中学校キャリア教育指導資料「埼玉県キャリア教育推進テキスト」 （埼玉県教育局）</p>
<p>http://www.pref.saitama.lg.jp/A20/BP00/sinro/siryomenu.html</p>
<p>小・中学校 9 年間のキャリア教育を分かりやすく解説した指導資料。児童生徒・保護者用リーフレットもある。</p>

<p>高等学校における「教科でのキャリア教育」推進のためのガイドブック （神奈川県立総合教育センター）</p>
<p>http://kjd.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/h18kenkyu/pdf/Career.pdf</p>
<p>高等学校におけるキャリア教育の基本的な考え方、各教科の各単元におけるキャリア教育の展開例、各教科におけるキャリア教育の授業実践例など。</p>



職業ガイダンスブック 就職サポータの基礎知識

(独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

<http://start.hrsys.net/guidancebook2007.pdf>

生徒・学生や若年求職者の就職活動を支援する立場にある人が、基礎的な知識や情報のチェックをするときの支援として作成された手引。

資料を使う

竹原市キャリア・スタート・ウィーク

～平成 17 年度文部科学省キャリア教育実践プロジェクト事業～

(広島県竹原市教育委員会)

<http://www.city.takehara.hiroshima.jp/gakumu/kyouiku/career.jsp>

竹原市キャリア・スタート・ウィーク研究紀要を掲載。

キャリア・スタート・ウィークの実践事例とそれに関する資料・書式など。

平成 16～18 年度文部科学省「キャリア教育推進地域指定事業」

片上小学校のキャリア教育 2004～2006

(岡山県備前市)

http://www.city.bizen.okayama.jp/shimin/school/bizen/s_katakami/main.jsp

3年間キャリア教育で使用したキャリア教育推進に役立つ資料を掲載。年間指導計画、指導案、ポートフォリオ、ワークシートなど。

起業教育・キャリア教育テキスト

(仙台市)

<http://www.city.sendai.jp/keizai/koyou/text/index.html>

第1章キャリア教育とは、第2章基本プログラム(自己分析、職業調査、社会交流)等で構成されている。ワークシートが多く、指導用資料もある。

キャリアガイダンス.net

(リクルート)

<http://shingakunet.com/career-g/index.html>

「キャリアガイダンス」「キャリアガイダンス[プラス]」「キャリアガイダンス@メール」の記事(一部)や各種データを閲覧できる他、記事で紹介してあるワークシートのダウンロードも可能。

キャリアカウンセリングを学ぶため

講話を聴く

キャリア教育研修に関する講義

(独立行政法人教員研修センター)

<http://sweb.nctd.go.jp/jirei.html>

キャリア教育を推進するための指導者の養成を目的とした研修に関する講義の動画を提供。

平成 16 年度～平成 18 年度筑波大学で行われたキャリア教育を推進するための指導者の養成を目的とした研修～基礎コース～を集録したもの。筑波大学渡辺三枝子教授による「キャリアカウンセリングについての理解」「多様な相談場面の理解」の講義などがある。

キャリア教育「4領域8能力を身に付けるために」を支援するサイトやツールの一覧

人間関係形成能力 自己を理解する

職業レディネステスト

(独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

<http://www.jil.go.jp/institute/seika/VRT.htm>

ホランド理論に基づく6つの興味領域(現実的, 研究的, 芸術的, 社会的, 企業的, 慣習的,)に対する興味の程度と自信度がプロフィールで表示。基礎的志向性(対情報, 対人, 対物)も測定。
対象者: 中学生・高校生

適性診断システム Career In ☆ Site

(独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

<http://www.jil.go.jp/institute/seika/careerinsite/index.html>

パソコンを使って, 適性評価→適性と職業との照合→職業情報の検索→キャリアプランの, 4つの職業選択プロセスを経験できる, コンピュータを使ったキャリアガイダンス・システム。主に18歳~30歳代前半までの学生や若年求職者が対象。

M I O職業興味チェックリスト

(大阪府職業カウンセリングセンター)

<http://www.pref.osaka.jp/sogorodo/counseling/>

職業興味, どのような仕事に興味をもっているかをチェックする。

Prep-Y 職業興味検査

(大阪府職業カウンセリングセンター)

<http://www.pref.osaka.jp/sogorodo/counseling/>

職業興味, どのような仕事に興味をもっているかをチェックする。

情報活用能力 上級学校を調べる

P A Sカード ホームページ

(図書文化社)

<http://www.toshobunka.co.jp/pascard/>

職業について, 上級学校について調べる。中学生向き。

情報活用能力 職業の情報を集める

キャリアマトリックス

(独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

http://cmx.hrsys.net/TOP/GC_01.php

職業情報とキャリアに関する総合的な情報サイト。約500職種の仕事内容を写真とともに解説。興味, ワークスタイル(価値観), スキルから適職を探索したり, これまでの経歴を分析し, それから適職を調べることもできる。

私のしごと館 JOB JOB WORLD

(独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

<http://www.shigotokan.ehdo.go.jp/jjw/top.html>

いろいろな仕事を紹介するサイト。いろいろな興味から仕事を探ることができる。仕事についての映像や仕事をしている人の体験談を聞くことができ, その仕事に就くための説明がある。

職業ハンドブックOHBY

(独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

<http://www.hrsys.net/ohby/>

現代の主要な 430 職種について、中高生向けに分かりやすく解説した、進路学習・ガイダンスのためのツール。学校での進路指導・カウンセリングやハローワーク・キャリア相談機関で活用することを目的に開発されている。簡単なテストで自分の興味・能力の特性を理解できる。

有望 100 職種ハンドブック (日本商工会議所)

<http://www.cin.or.jp/needs/yubo/main.asp>

100 職種について、仕事の概要、求人ニーズの概要、必要な能力・スキル、能力開発、金銀相場などについて説明してある。

夢ランドー仕事発見ルーム

http://www.j-n.co.jp/kyouiku/yume/01_hakken/top.html

仕事の環境、その仕事になるためには、先輩からのアドバイス、こんな人が向いていますという項目で説明してある。仕事を詳しく知るためのヒントになるホームページを紹介している。

しごとインタビュー (社団法人雇用問題研究会)

<http://www.koyoerc.or.jp/sigoto.html>

「職業安定広報」掲載のしごとインタビューを、生産関連の職業・建設の職業・オフィスの職業などで分類してある。

将来の仕事なり方完全ガイド

<http://kids.goo.ne.jp/island/study/work/index.html>

将来のやりたい仕事を、興味のあるジャンルで検索、長所で検索、50 音順で検索できる。それぞれの仕事について仕事の内容、なるための方法などを掲載。

職業調べナビゲーション未来の仕事を探せ！ (学研キッズネット)

<http://kids.gakken.co.jp/campus/shinro/>

いろいろな仕事についてのなり方を調べたり、どの仕事に向いているかをチェックできる。先輩たちの貴重なアドバイスやメッセージがある。

情報活用能力 職業生活を知る

就職サポートブック For the Young こんなあなたに… (独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

<http://start.hrsys.net/supportbook2006.html>

就職活動中の若い人を対象に就職までのステップを掲載。就職情報の見方や就職の基礎知識を掲載。チェックシートあり。

高校生就職スタートブック (独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

http://start.hrsys.net/download_startbook.html

就職を希望する高校生に就職活動に先立っての基礎知識を掲載。ワークシートあり。

将来設計能力 将来設計をする

ドリームマップ (株式会社エ・ム・ズ)

<http://www.dream-map.info/>

ドリームマップ研修は、将来の「なりたい自分像」を明確にイメージ&ビジュアル化し、広く周囲に公言し、その認知・受容を得る。それにより、一人一人が自己に対するイメージをプラスに変化させ、その実現に向けた発展的かつ前向きな行動を起こす。

意思決定能力 起業家育成ソフトを利用する

「web 体験版コンビニシミュレーション」 製品版の簡易モデル (アントルビーンズ)

<http://www.kigyokakyoiku.com/sample/conveni.html>

コンビニ経営者となり、どうしたら買ってもらいやすくなるのか仮説を立て、データで検証し、お客様の気持ちを考えて喜ばれるお店をつくる。

「ビジネスゲーム コンビニ経営」 (実教出版)

<http://www.jikkyo.co.jp/>

コンビニエンス・ストアを材料に、「どこのお店に行きたいか、どの商品を買いたいか」という消費者から、「どうすればお客に来てもらえるか、買ってもらえるか」を考える経営者への逆転を体験。問題を見付け、多角的・具体的な視点で解決の道を探る思考方法を身に付けられる。デモ版のダウンロードができる。

「やってみ店長」 (ベネッセコーポレーション)

http://www.teacher.ne.jp/product/s_ytt/index.html

コンビニの経営者となり、出店計画・店舗内設計を行う。体験版がダウンロードできる。

2 キャリアカウンセリングの理解とコミュニケーション能力の向上演習例

(1) キャリアカウンセリングについて

キャリアカウンセリングは、児童生徒の進路や人生設計にかかわる相談に対するカウンセリングであるが、カウンセリングとは大部分が言葉を通して行う援助過程であるので、言語表現力が問われる活動である。そこでは、カウンセラー（教員）がクライアント（来談者＝児童生徒）の自己理解を進め、よい意思決定ができるようになることを援助することが目的であり、そのために、カウンセラー（教員）がその環境をつくり、情報や刺激を提供するのである。

その例として、進路相談の場面では次のことを考えるとよい。

ア カウンセラー（教員）が配慮したいこと

カウンセラー（教員）は、進路相談の場面において、「言ってはいけない言葉」「とってはいけない態度」（資料2）を念頭に置き、自分の進路相談の様子を振り返ることが大切である。

【資料2】

〈言葉〉	×「大丈夫だよ」	→ 安易な保障に受け取られる。
	×「何とかなるよ」	→ 気休めと受け取られる。
	×「みんなそうだよ」	→ 気持ちがはぐらかされる。
	×「心配しなくてもいい」	→ 生徒の気持ちを否定。
	×「とにかくがんばれ」	→ かえってプレッシャーになる。
	× 正しすぎる意見	→ 事実だが、今は言われたくない。
〈態度〉	×無関心な態度	→ 信頼を失う。
	×聞き流してしまう	→ その場限りにせず、継続的に。前回の話を記憶。
	×タイミングを外す	→ その時だから聞いてほしい・話したいことがある
参考資料：メディア教育開発センター「学校教育とカウンセリング」シリーズ『進路指導での実践事例』第6巻		

イ 相談場面について

学校行事に組み込まれている生徒面談もあるが、日常の児童生徒との接触や相談の場面の方が圧倒

的に多いので、そうした日常の相談場面を大切にすることがある。その場合には、短期間で継続的に行うとよい。こちらから声を掛けて相談を引き出すことも必要になることがあるので、それに対応するために、何気ない生徒の言葉やしぐさを逃さずにとらえることが必要である。また、保護者を含めた三者懇談や、複数の生徒との相談を受ける場合もあるので、教員は様々な場面に対応する力を付けることが大切である。相談内容については、相談者が置かれている状況を的確に理解し、話の焦点の当て方を工夫するとよい。なお、個人情報の保護には十分留意することは言うまでもない。

(2) 「コミュニケーション能力」を高める演習

校内教員研修として、次のような演習が考えられる。

ア 演習の方法

3人1組になり、話し手・聴き手・観察者の役割をその場で決め、「キャリア教育を進めるに当たって、現在直面している自校の問題点」をテーマに、3分間の演習を実施する。

<演習のポイント>

A：話し手 … 聴き手に「分かってもらおう」ということを意識して話す。

B：聴き手 … 話を分かろうとする態度が大切なので、話し手が「もっと話したい」というような受容的・共感的態度で臨む。

C：観察者 … 話し手の表情や態度を観察することで、話し手が「本当に伝えたいこと」を知る。聴き手の様子から、「本当に伝わったか」を読み取る。

イ フィードバック

先ほどの演習に基づいて、内容を確認する。

<確認のポイント>

B：聴き手 → 理解した話の内容を話し手に伝え、内容を確認してもらう。

C：観察者 → これまでのやりとりを見ていて、感じたことを述べる。

A：話し手 → 聴き手の聴き方や観察者の講評を聞いて、感じたことを述べる。

ウ 留意すべき点

話し手として、留意すべきことは、最大限に時間を活用して、テーマについて話すことである。重要事項についてはジェスチャーを交えるなどして、自分の話したいことが正しくうまく伝わるようにするとよい。また、発表中は相手に意見を求めないようにし、語ることに徹する。フィードバックの際には、自分の話した内容が、正しく相手に伝わっているか確認する。話し方・伝え方の悪かったところを改善工夫することによって、コミュニケーション能力が高まる。また、相手の反応によって話の内容・量・深度が変わることに気付くはずであるので、どのような反応で話しやすくなり、どのような反応で不安になるのか体感できるとよい。

聴き手は、適切なコミュニケーション能力で応じ、話し手の発表中は質問をしたり意見を述べたりはしないようにする。どうしたら話し手が楽に話せるようになるか工夫する。また、面談中のメモは相手にとってプレッシャーとなるため、必要な記録は後で行うようにする。話しやすい雰囲気づくりができたか、相手との距離・視線・姿勢・相づち・短いフィードバックの言葉など、相手が話しやすく感じる聴き方ができたか考察するとよりよい聴き手になる。

観察者は、話には加わらず、話し手や聴き手の様子をよく観察し、雰囲気、話の流れ、雰囲気が変わるきっかけとなった言葉や聴き手のしぐさなどを観察する。率直な感想を述べる中で、肯定的な評価が効果をもつので、失敗の指摘よりも成功の確認をするように気を付けるとよい。

エ まとめ

実際のキャリアカウンセリングの場面では、カウンセラーとして教員は、話し手・聴き手・観察者の三つの役割を同時に果たさなければならない。したがって、何らかの問題に直面した児童生徒の生きる力をはぐくむために、教員のコミュニケーション能力を日常的に磨いておく必要がある。

コミュニケーション能力 = 話す能力 + 聴く能力 + 観察する能力

追手門学院大学人間学部教授 三川 俊樹先生の講座より

3 学習指導案作成をとおして

各教科・領域の指導内容を、キャリア教育の視点でとらえ直し、児童生徒の「生きる力」の育成につなげることを考えた単元構想案や学習指導案を作成することは、校内教員研修の一つの活動として、大変有意義である。どの教科・領域の中にも「生きる力」の育成につながる内容が含まれているので、個々の教員で、あるいは、研修のグループワークとして実施可能であり、実際に作成した指導案に従って授業を展開することも可能である。

このような単元構想案や学習指導案を作成する際に留意すべき点は以下のとおりである。

- ① 自校の児童生徒の発達段階や発達課題の達成度を的確にとらえた上で、各学校の実情に応じた学習プログラムの枠組み等を作成する。
- ② それぞれの単元、又は、授業で、付けたい能力を明らかにする。
- ③ 学習内容を設定する上での工夫、学習方法の開発・工夫等を考える。例えば、家庭・地域・企業等との連携や協力による取組を考えることも有効である。

なお、①については、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター）の「職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）」等を活用するとよい。

このようにして、単元構想案や学習指導案を考えることが、教員の目をキャリア教育に向けるきっかけになるとともに、結果的に、授業を改善することを考えることにもなる。

ここにその成果物の例として、「第3学年 社会科学学習指導案」と「第6学年 総合的な学習単元活動案」を掲載するので、参考にしてほしい。

第3学年社会科学学習指導案（例）

- 1 単元名 人々のしごととわたしたちの暮らし
- 2 目標 買い手（わたしたち）と売り手の両方の視点を持ち、人気のある店（スーパー）の秘密について考えることができる。
- 3 過程

区分・形態	主な学習活動と予想される児童の反応	指導・支援【キャリア教育の評価】
導入 一斉 10分	<p>1 調べてきたことを発表する。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">A店に来たお客さんにインタビューしたことを発表しよう</p> <p><どこからきたの?> <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇方面, △方面, 〇〇方面… <p><どうやってきたの?> <ul style="list-style-type: none"> ・自動車, 自転車, バス, 歩き… <p><この店に来た理由は?> <ul style="list-style-type: none"> ・安いから, 新鮮だから, 種類が多い </p></p></p>	<p>・多くの子に発言の機会を与えながら, インタビューの内容ごとに分けて整理して板書をする。</p> <p>【自分がインタビューしたことを基に進んで発言することができたか】 (コミュニケーション能力)</p>
展開 グループ交流 25分	<p>2 本時の学習課題を確認する。</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">A店の人気のひみつをさぐろう</p> <p>3 グループでA店の秘密について考える。</p> <p><店の工夫> <ul style="list-style-type: none"> ・値段…特価, 本日の目玉商品がある。 ・種類…豊富な種類の中から選べる。 一度にいろいろなものが買える。 ・陳列…見やすく並べてある。 ・鮮度…店の回転がよく, 新鮮。 ・店員…元気がよい, 親切。 <p><お客さんの願い> <ul style="list-style-type: none"> ・新鮮…おいしくて, 安心。 ・安心…生産者の顔が見える。 ・親切…作り方や保存の仕方を教えてくれる。 ・駐車場…車で行けるので便利。 </p></p>	<p>・インタビューで出てきたことやお店の見学をして気付いたことを基に考えさせる。</p> <p>・考えをまとめやすいようにワークシートを用意し, 「店の工夫」と「お客さんの願い」の両面から考えさせたい。</p> <p>・なかなか意見の出ないグループは, 見学メモから想起させたり, 消費者の立場として考えさせたりする。</p> <p>【見学したことやインタビューしたことを基に店の工夫に気付くことができたか】 (職業理解能力)</p>
終末 個別 10分	<p>4 今日の学習で分かったことをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新鮮な品物を数多く並べて, たくさんのお客さんに満足してもらえるように努力している。 	<p>【A店の人気の秘密について二つの視点から考えることができたか】 (職業理解能力)</p>

4 評価

お客さんが集まる店の工夫について, 調べたことや話し合いを基に考えを深めることができたか。

第6学年 総合的な学習単元活動案 (例)

単元『働く』ってどういうこと? (35時間)

3年「社会」：人々の暮らしとわたしたちの暮らし
：暮らしをまもる
4年「社会」：住みよいくらしをつくる
：わたしたちの県

5年「社会」：わたしたちの生活と食糧生産
わたしたちの生活と工業生産
わたしたちの生活と情報

【他教科等の関連】

【キャリア教育との関連】

学活
後期の係活動を決めよう

道徳
(男女の協力)

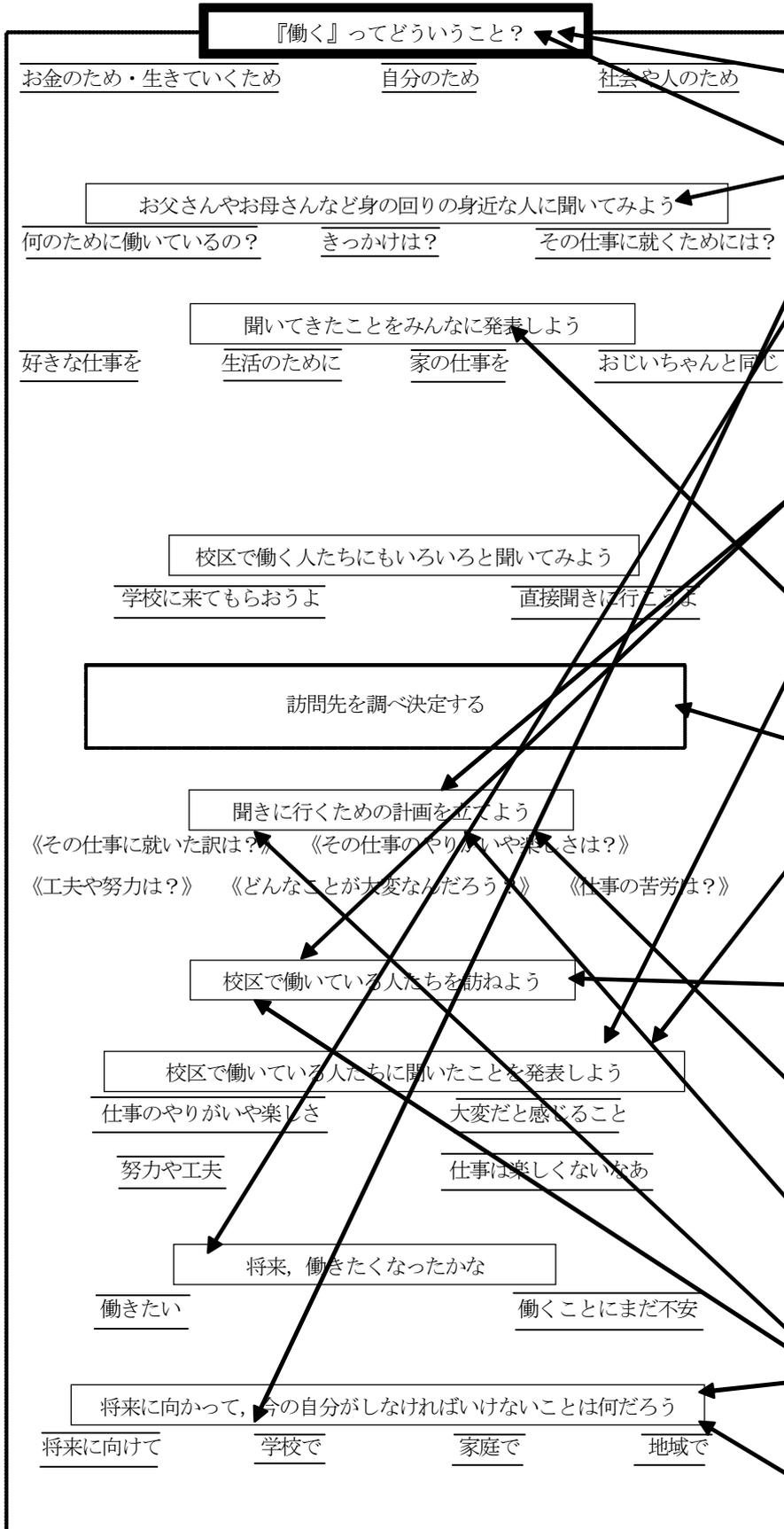
国語
気持ちのよい話し方をしよう
・相手の立場や状況などを考えて話をする
とよいことを思い出させる。

道徳
(勤労・奉仕作業・公共心)

学活
自分のよさや友人のよさを知ろう
・自分が気付かない自分のよさを友人からの指摘などで見つけることができるとともに、友人のよさについても積極的に見付けようとする。

道徳
(向上心、個性の伸長)

学活
中学校に向けて
・中学校生活についての豊富や希望をもたせるとともに、小学校を卒業するに当たって自分たちにできることを考えさせていく。



自他の理解

- ・働く、ということに対する自分や友達の考えを知る。
- ・働く、ということに対する考えを深める。
- ・今の自分にできることを考え、実践しようとする。
- ・自分に合った職業について考えることができる。

コミュニケーション能力

- ・必要に応じたあいさつができる。
- ・インタビューの仕方が分かる。
- ・自分の知りたいことを的確に聞くことができ、また、相手の考えを理解する。
- ・調べたことを分かりやすく伝えることができる。

情報収集・探索の能力

- ・校区にある事業所について調べることができる。
- ・聞いたり調べたりしたことを分かりやすくまとめることができる。

職業理解の能力

- ・事業所や働いている人たちの仕事の内容等が分かる。

役割把握・認識能力

- ・聞き取り調査の計画、当日の役割について理解する。

計画実行能力

- ・聞き取り調査へ行く際の計画を立てることができる。

選択能力

- ・どの事業所へ聞き取り調査に行くか決めることができる。

課題解決能力

- ・聞き取り調査の内容を決め、自分の知りたいことの解決に努めることができる。

小学校における取組「コミュニケーション能力の育成を通して」

西尾市立西尾小学校

1 はじめに

小学校のキャリア教育で、特に子供たちに身に付けさせたいものは「自己肯定感」であると考えている。それには「人」とのかかわりが、不可欠であろう。西尾小学校では、家庭で「しつけ」学校で「教え」地域で「育てる」を基本姿勢に、地域と共鳴しながら学校教育がなされている。

小学校でのキャリア教育は全教育活動を通して機能させることが可能である。日々の取組をキャリア教育の視点からとらえ直してみると決して特別な活動ではなく、キャリア発達にかかわる4領域・8能力は様々な場面ではぐくまれると言えよう。その中でも特に「人間関係形成能力」を付けさせたい。そのための手だてとして、「コミュニケーション能力の育成」と「自己肯定感の育て方」に重点を置いた。これらは子供たちが「ひと」とつながり、かかわることで培われ、はぐくまれる。子供たちを取り巻く「ひと」とは、家族・子供・町の人・教師である。キャリア教育を通して、子供たちが今の自分を知り、可能性のある自分を信じ、人とよりよくかかわりつながることで、未来に向けてなりたい自分を実現できるように願い、本実践を行った。

2 本校とキャリア教育

本校ではキャリア教育の目標として「小さな社会でしっかり学び、大きな社会でたくましく生きる」を掲げている。

(1) キャリア教育を支える4領域の能力

キャリア教育ではぐくむ4領域の能力を、本校では次のように、更に具体化している。

- ① 人間関係形成能力（コミュニケーション能力・自己肯定感・あいさつ・感謝・協力・信頼）
- ② 情報活用能力（働くことに興味関心をもつ・働くことの意義が分かる）
- ③ 将来設計能力（自分の役割を知る・夢や希望をもつ）
- ④ 意志決定能力（自分で考え自分で行動する・責任を持って行動する）

(2) キャリア教育における位置付け

子供を取り巻く「ひと」と「場所」については、次のように認識している。」

子供たち・・・自己と他者相互受容

教師・・・・・・・・一人一人の課題に対応した支援

町の人・・・・・・・・職業理解のための支援

町・・・・・・・・小さな町づくり人・社会人としての実践の場

家族・・・・・・・・生活上の多用な役割や意義及び関連等を理解し、自己の果たすべき役割などについて認識を深める場

(3) ねらい

ア コミュニケーション能力の育成

＝互いに考えを伝え合い、感情を理解し合う力 【人間理解】
【クラスの雰囲気づくり】

コミュニケーションタイムでコミュニケーション能力の土台づくり

イ 実体験を取り入れ、人とのかかわりの中から自己肯定感を高める。

ウ 総合的な学習・町学習でコミュニケーション能力を生かす。

今までの学習経験や生活経験のすべてを総合的に活用する場の設定

=問題解決のプロセスを重視する。

(4) 手だて

① 全学年を通してコミュニケーションタイムを設定し、コミュニケーション能力を付ける。

【電子カルテ「あゆみ」から見るコミュニケーションの力の育ち】

【コミュニケーション能力を付けるスキル】(資料1 巻末)

② 国語科・・・「話す・聴く」の単元実践でスキルを身に付ける。

【1年生「きいてきいてよんでよんで」】

生活科・・・五感を使った体験を大切に、主体性を引き出す。

【1年生「木は友だち・うっ木っホーランドをつくろう」】

③ 総合的な学習の時間(町学習)で話し合いの授業を取り入れ、問題解決能力を付ける

【5年生「ここがすごいぞ!職人さん」・仕事体験】

④ 家庭との連携・・・家族の大切な一人として自覚する「めざせ!スーパー1年生」カード

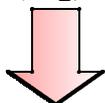
(5) 本校のキャリア教育にかかわる活動ステップ

愛着・・・身近な人や場所への愛着を深めつつ、町の中で・・・1年



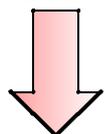
自分にはぐくまれているんだという情緒の安定、
安心感をもつ。

共感・・・自然や人の痛みや喜びを共感でき、自分と環境の・・・2年



かかわりを積極的に考えようとする。

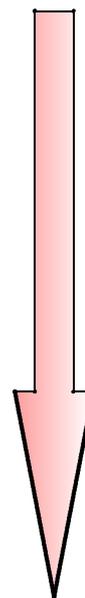
参加・・・何らかの環境や福祉の改善につながる具体的な行・・・3年・4年



為・行動に向けて情報を駆使しつつ、参加しよう
とする。

提案・・・自分の意思表示や提案・表現する力を高め、現実・・・5年・6年

の課題に前向きに対処していこうとする。



キャリア教育と関連性のある 総合的な学習の時間・生活科	職業的発達に かかわる諸能力	発達課題
1年生「木は友だち」	人間関係形成能力	【自分と他者を理解する力】 友達と仲良く遊び助け合う
2年生「見て!さわって!感じて!やぎのいのち」	人間関係形成能力	【自他の生命を大切にする】 ヤギの飼育・世話・出産
「聞いて西尾のむかしばなし」	情報活用能力	【社会で共に生きる力】 町の人に昔話を聞き、町に関心をもつ
3年生「大好き!この人!この町」	人間関係形成能力	【コミュニケーション能力】 町のすてきな人見付けをし、仲良くなる
	情報活用能力	【情報収集】 インタビューの仕方を学ぶ
4年生「聞いて!城 下町の水の声」	情報活用能力	【情報を集め活用する力】

	意志決定能力	水質調査・川マップづくり 【自らの課題を見付け解決する力】 川をきれいにするために自分たちでできることを考え実行する
5年生 「西尾の職人 見付けよう！キラリ輝く 心と技」	人間関係形成能力	【コミュニケーション能力】 あいさつ・職場体験事前交渉活動
	情報活用能力	【職業理解能力】 職場体験を通して働くことの大切さややりがいを知る
	将来設計能力	【計画実行能力】 職場体験計画を立てる
	意志決定能力	【選択能力】 自分の決めた職場体験活動を最後までやり抜く
6年生 「提案！21世紀の町づくり」	将来設計能力	【課題解決能力】 将来の夢や希望をもち実現に向けて努力しようとする。 【計画実行能力】 町改造の計画を提案する
特別支援「うさぎさんとなかよし」	人間関係形成能力	【自他の生命を大切にする】 うさぎの飼育・世話・出産

(6) 方法

ア 西尾の町と人材を生かす

- ① 町にかかわる対象として学区に住む「職人・働く人」を取り上げる。 【地域教材】
- ② スピーチで養ったコミュニケーション能力を町の人とのかかわり合いの中で生かし、伸ばす。
【コミュニケーション能力の活用と育成】
- ③ 聞き取りや見学などによる調査内容を、発表やポスターセッションなどを通して表現する。
【表現活動】

イ 主体的な学びを目指して

- ① 将来の職業生活や人間としての生き方に夢や希望がもてるよう、主体的な職業体験活動を取り入れる。 【職場体験】
- ② 町学習と各教科のそれぞれで身に付けた知識・思考や技能などを意図的に関連付ける。
【町学習と各教科との相互関連＝共振し合う学習活動】
- ③ 体験や調べ学習を中心とした個人追究と、思考を中心とした全体追究のプロセスを、単元に位置付ける。 【知の交流】
- ④ 個の学習状況に応じたアドバイスをする。また、学習カードへの朱書きを通して、子供自身が適切に判断し、主体的に活動できるように支援する。 【教師支援】
- ⑤ 時間を効果的に使い、深く追究する態度を養うために、夏季休業中に職場体験活動を設定する。
【追究活動における十分な場と時間の保障】

3 実践の実際

(1) コミュニケーション能力をはぐくむ実践

(資料1参照 巻末)

ア 目標

- ① 身の回りや社会にかかわる題材を見付けてスピーチをすることができる。

- ② スピーチの内容にかかわらせながら、自由な雰囲気、思いや体験を基にした意見交流をすることができる。

イ 西尾小学校のコミュニケーションタイムの特色

- ① 給食の後の15分を利用して実施する。
 ② 一人、若しくは、数人のスピーチと、その後の意見交流で構成する。
 ③ スピーチはクラス全体に話題を提供するという立場で話す。聞く側は、話すために聞くという聞き方をし、スピーチの内容にかかわらせて、積極的に意見交流をする。
 ④ 意見交流では、基本的に何を発言してもよいという姿勢で行う。

ウ コミュニケーションタイムで育てたい力

	内 容	技 能	
低 学 年	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りのものや出来事を話すことができる。 自分のしたこと、見たこと、聞いたことの体験を話すことができる。 	話し手	<ul style="list-style-type: none"> 「です」「ます」を使い、語尾まではっきり話す。 主語と述語を使って話す。 必要に応じて、身振りを加えたり、絵や写真を使って話す。
		聞き手	<ul style="list-style-type: none"> 話し手を見ながら聞く。 スピーチに対する感想を言う。
中 学 年	<ul style="list-style-type: none"> 自分のしたこと、見たこと、聞いたことの体験を詳しく話すことができる。 体験に、自分の思いや考えを加えながら話すことができる。 	話し手	<ul style="list-style-type: none"> 5W1Hを入れながら話す。(いつ・どこで・だれが・何を・どのように) スピーチメモを活用して話す。
		聞き手	<ul style="list-style-type: none"> うなずきながら聞く。 スピーチの内容と自分の体験を重ねながら聞く。 一番言いたいことは何か考えながら聞く。
高 学 年	<ul style="list-style-type: none"> 社会的な事象や事実に向け、自分の意見を入れながら話すことができる。 場面が浮かぶように詳しく話すことができる。 	話し手	<ul style="list-style-type: none"> 話す順番を意識して話す。 ものを見せるなど、聞き手を引き付ける工夫を考えて話す。
		聞き手	<ul style="list-style-type: none"> 表情豊かに聞く。 スピーチの内容と自分の体験を関連付けながら意見や感想を言う。 自分の考えとい違うところはどこか考えながら聞く。

《電子カルテ「あゆみ」から見るコミュニケーション能力の育ち・1年生の実践から》

【分析の視点 スピーチにおけるユーモアの研究】

『あゆみ』の記述より、実際に話したように言った「起っきろー」や「ぷりぷり」のように動きを的確に表した言葉が話し手のスピーチに勢いを付け、猫の様子を視覚化できたことで、聞き手とユーモアの共有ができた。身振り手振りを使っておかしさを見せて、効果的に面白さを視覚に訴えた。また、笑いを起こすことで多

「ネコの顔まね」

ペットのネコについての話で、「ぼくのうちのミーは、ぼくのベッドの上でこーんな顔をして眠っていました」と言いながら、ネコの顔まねをした。彼の頬を膨らませたおかしい顔は、みんなの笑いを誘った。「ぼくが『起っきろー』と言ったら、おしりをぷりぷりやって走っていきました」と楽しそうに話を続けた。

6月15日「電子カルテ」より

くの聞き手の興味を引き、話し手もその笑い声により、リラックスし、話すことの喜びを感じているようだった。

【分析の視点 スピーチが次の行動の動機付けになることはあるか】

児童Aがスピーチで言った「ありがとう」という母親への感謝の言葉が、学級の多くの子の心に響いた。児童Bは、「給食のおばさんに『ありがとう』と言いたい」と話した。

その後、他の多くの子供たちは、母親にうれしいごはんを作ってもらったことや父親に遊んでもらったことなどを思い出し、家に帰ってそれぞれの家庭で、感謝の言葉を家族に伝えた。そして、その感謝の言葉が翌日のスピーチで語られると、その対象は、学校でお世話になっている人たちへと広がり、感謝の言葉『ありがとう』の輪ができていった。児童Aのスピーチの内容が、学級全体の行動の動機付けとなったと言える。

「ありがとうの輪」

昨日のスピーチで、児童Aが「お母さんが、ブドウを買ってきてくれました。すごくおいしかったので、『ありがとう』と言いました」と話した。それを覚えていたのか、今日のスピーチ者は、「お父さんが、釣りに連れて行ってくれたから『楽しかったよ。ありがとう』と言ったら、…」と話した。児童Bは「今日の給食の焼きそば、すごくおいしかったから給食のおばさんに『ありがとう』と言いたいです」と話した。

7月18日「電子カルテ」より

(2) 1年生生活科での実践 <人間関係形成能力を育てる>

「木は友だち ーうっ木っ木ーランドをつくらうー」

- 目標 ① 自己肯定感を養う・・・棟梁、友達とのかかわりから、自分を見つめる。
 ② 主体的に活動させる・・・遊びや遊び場を考え、必要な物を計画を立てて準備する。

活 動 内 容 ()は配当時間を表す	獲得させたい職業的発達にかかわる諸能力
<p>錦の森で遊ぼう (2) 錦の森で木と遊ぼう (2) ・錦の森や木に関心を向けるため、放課に木で遊ぶ子たちの遊び方を広め、学級で遊ぶ活動をする。</p> <p>木とともだちになろう (2) 木の達人にお話を聞こう ・【大工の棟梁】 木の達人から、木を使った遊び場づくりの提案を聞くことで、その活動への意欲をもつ。 ・【木の博士】 五感を使って木と触れ合う方法を教えてもらい、木への愛着を深めるために、木の博士(常葉大学教授)を紹介する。</p> <p>みんなで秘密基地をつくらう (6) 葉っぱのお面で遊ぼう (1) ・丸太を用意することで、放課にも木を使って自由に遊べるようにし、木の遊びの経験を積む。一方で、遊びの発想を広げるためのプランコなどは生活科の時間だけの設置に制限し、不足感と安全面の意識をもつ。 【棟梁と一緒に】 ・伊文神社のどんぐりや大王松の松ぼっくりを拾いに行く。 ・実や葉っぱでおもちゃを作つて遊ぶ。 ・木のバッジを作る。</p>	<p>情報収集・探索能力 人間関係形成能力</p> <p>職業理解能力</p> <p>情報収集・探索能力</p> <p>役割把握・認識能力 人間関係形成能力</p>

<p>木のブランコを作ろう ターザンロープを作ろう 登り綱で遊ぼう 綱渡りで遊ぼう</p>		
<p>うっ木っ木ーランド祭りをしよう (19)</p>	<p>ランドの計画を立てよう (3) (資料2 巻末)</p>	
<p>・ランドづくりにじっくり取り組む場を保障するために、その期間、錦の森の借用を全校に許可してもらう提案をする。 ・具体的なもので分かりやすくし、子供のかかわりを活性化するために、模型や写真などを用いる。</p>		<p>計画実行能力 課題解決能力 人間関係形成能力</p>
<p>ランドを作ろう (10) (資料3 巻末)</p>		
<p>・自分たちが作ったという自覚をもつために、材料の運搬や(一部の安全な)作業に取り組む時間を設ける。</p>		<p>情報収集・探索能力</p>
<p>材料運び のこぎり引き 穴掘り ロープ結び</p>		
<p>みんなで作ったランドで遊んでみよう (2)</p>		
<p>・安全に気を付けて仲良く遊ぶ。</p>		<p>計画実行能力</p>
<p>祭りの計画をたてよう (2)</p>		
<p>・木の実を使った飾りやおもちも取り入れる。</p>		<p>課題解決能力</p>
<p>・模型を使って場所や地形にあった遊び場を考える。</p>		<p>計画実行能力</p>
<p>お家の人や幼稚園の子を招待して祭りをしよう (2)</p>		
<p>・祭りを成功させるという気持ちを高めるために、お客さんを招待する提案をする。</p>		<p>人間関係形成能力</p>
<p>ありがとう！うっ木っ木ーランド (3)</p>		
<p>錦の森を元に戻そう (3)</p>		
<p>・安全や後始末の大切さを知るために、取り壊さなければならないことを提示する。</p>		<p>計画実行能力</p>

(3) 5年生 総合的な学習と国語科で職業観・勤労観を育む実践

ア コミュニケーション能力を実践的に活用する。

追究したい職人さんの所へ行って、子供たち自身が弟子入り交渉を直接行う。交渉の内容としては、弟子として行う仕事の内容や日程等である。何度もお願いに行き、やっと弟子入りを許してもらった。教室で培われたコミュニケーション能力が実践的に生かされる場面であった。

イ 職業観をはぐくむ実践・・・職人さんを追究する活動

夏休みを使って、仕事体験をした。「見る」「聞く」「体験する」など五感を使った仕事体験は職業や職人さんの生き方そのものを理解するよい機会になった。

ウ 勤労観を育む実践 (資料4 巻末)

職人さんの生き方に迫る話合いの授業で、後継者問題の記事を取り上げ、職人さんの苦労や生き方をとらえる。国語科「千年の釘にいどむ」(光村図書)の教材の発展領域で鍛冶職人の生き方に迫る。

4 成果と課題

(1) 成果

ア 教師や家族以外の大人(棟梁)とのかかわりの中で安心感が得られた。それは、棟梁の人柄の影響も大きい。その安心感の中で子供たちは挑戦し、頑張る姿をその場で認めてもらえたことは子

供たちの大きな自信となった。何度も木登りを挑戦する子や発言が積極的になる子も増えた。自己肯定感の芽生えがみられた。

イ コミュニケーション能力では、毎日の積み重ねで、人前で話すことに抵抗がなくなり、「話すこと」「聞くこと」及び「伝え合うこと」を楽しみにする子が増えてきた。そして、視点を設けて分析した結果、かかわり合いのある話合いができるようになってきた。また、町学習での一人調べや町の人との交流の場においても、粘り強くインタビューをしたり、疑問に思うことを聞いたりする子が増えた。

ウ 5年生の国語科で「千年の釘にいどむ」（光村図書）の学習をすることも、職人さんをとらえる上で有効であった。町学習で調べている職人さんのことと、「千年の釘にいどむ」の鍛冶職人さんのことを重ね合わせて、考えるようになった。話合いの場では教科書に出てくる「なっとく」「やりとげるといった言葉も使用されるようになった。また、国語でも読み取りが深まった。これは町学習での仕事体験や職人さんとのやりとりで実感したことが、大きく影響していると考えられる。

（資料5 巻末）

エ 職人さんの後継者問題や苦勞など、様々な職人さんの生き方を考える話合いの授業をすることで、職人さんのよさを広めたいという、主体的な行動をおこす子も出てきた。（資料6 巻末）

（2）これからの可能性

ア 子供たちの追究意欲は様々であるので、一斉に活動を組むのが難しく、授業以外の時間にも頼ってしまった部分がある。

イ すでにキャリア教育が行われている学校区の中学校を視野に入れた単元づくりと連携方法の構築が必要である。

ウ 電子カルテを使って個のキャリア教育に関する記述を中学校に送り、連携方法の確立を図ると一層効果的なキャリア教育になる。。

5 おわりに

町の職人さんや働く人は、子供たちに様々なことを教えてくれた。子供たちにとって職人さんはあこがれの存在であり、尊敬すべき人物となっていた。また、今回の様々な経験は、子供たちの生きる力の土台となるであろう。彼らが大人になる過程の様々な場面で、今回の実践で学んだことが思い出され、職人さんの技や心から学んだことが「生き方」に反映されることを願う。

コミュニケーション力をつける①

○コミュニケーションを円滑にするための四つの基本原則

- ①目を見る ②ほほえむ ③うなずく ④相づちを打つ

☆「目を見るために」

【アイコンタクトゲーム】

- ①クラス全員が立つ。
- ②スピーチをする間に、聞き手と一人一人目を合わせていく。
- ③しっかりと目が合ったと思った人から座っていく。全員を座らせることができたなら合格。

※何となく見たではだめ。はっきりピンポイントで、焦点を当てて見るんだよ。1～2秒でいい。目からレーザービームが出ている感じで。一人一人確実に目を合わせていく気持ちで。

☆「ほほえむために」

※やはり必要なのは意識と練習です。欧米の家庭では、子供に「ほほえみ」を練習をさせるそうです。鏡の前に立たせ、口の横あたりをフツとゆるめる。そう言えば、すれ違ふとき、知らない人にでも、あいさつ代わりにフツとほほえんでいくことが多い。中学年あたりから仕込むと身に付きやすいと思います。是非練習を！

☆「うなずく・相づちを打つために」

【うなずき君、相づち君ゲーム】

スピーチの合間、合間に、聞き手は「うん」と声を出しながら大きくうなずく。タイミングは、文の切れ目の[マル]のところで合いの手を入れる感じである。話し手は、合いの手を意識して、意味の切れところで間を置く。聞き手は、みんなそろえてコクンと頭を下げる。相手の読みを意識し、呼吸を合わせる練習である。

例)「あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。」「うん」「おじいさんは山へ芝刈りに行きました。」「うん」「おばあさんは川へ泳ぎに行きました。」「うん」・・・

※最初はだれでも知っている昔話がいい。「うん」を「へー」とか「なるほど」「そうですね」などに置き換えると、『笑っていいとも』調になり、楽しく相づちを打つ練習になる。

コミュニケーション力をつける②

☆「ことばで伝える」

【ことばだけで伝えるゲーム】

《準備》クラス全員に（話し手はのぞく）、白紙を配る。

- ①代表児童に下のような記号や図形を見せる。
- ②話し手は、ことばだけでその形をクラスみんなに伝える。聞き手は、それを白紙にかく。
- ③話し手は、答えを黒板にかく。聞き手は、隣どうしで紙を交換し、100点満点で採点をする。50%が100点だったら合格。
- ④どのように話せば正確に伝わるか話し合う。

※聞き手には、話し手の内容を予想して書くのではなく、聞いたそのままにかくように指示する。小グループでやってもおもしろい。

コミュニケーション力をつける③

☆「からだで音読する」

【準備体操】

- ・軽くジャンプ
- ・からだをゆさぶる（肩が動くように）
- ・からだを液体化
- ・四股立ち
- ・肩入れ

【最速読み】

- ・速く正確に読む。間違えるところまで読む。1人読み。

【点回し読み】

- ・「、」「。」で次の人に移る。「、」「。」で間をあけない。前の人の最後の一語と次の人の最初の一語を重ねる感じ。少人数でもクラス全体でやってもおもしろい。

【からだで音読】

- ・二人一組。おんぶして音読。おんぶの下の人を読む。おんぶして歩きながら読む。声を腹から出す。踏みしめるリズムに声を合わせて読む感じ。

【一冊読破】

- ・5時間かけて『坊ちゃん』を読破。大きな自信につながる。

コミュニケーション力をつける③

☆「からだで音読する」

【準備体操】

- ・軽くジャンプ
- ・からだをゆさぶる（肩が動くように）
- ・からだを液体化
- ・四股立ち
- ・肩入れ

【最速読み】

- ・速く正確に読む。間違えるところまで読む。1人読み。

【点回し読み】

- ・「、」「。」で次の人に移る。「、」「。」で間をあげない。前の人の最後の一語と次の人の最初の一語を重ねる感じ。少人数でもクラス全体でやってもおもしろい。

【からだで音読】

- ・二人一組。おんぶして音読。おんぶの下の人が読む。おんぶして歩きながら読む。声を腹から出す。踏みしめるリズムに声を合わせて読む感じ。

【一冊読破】

- ・5時間かけて『坊ちゃん』を読破。大きな自信につながる。

(1) 目標

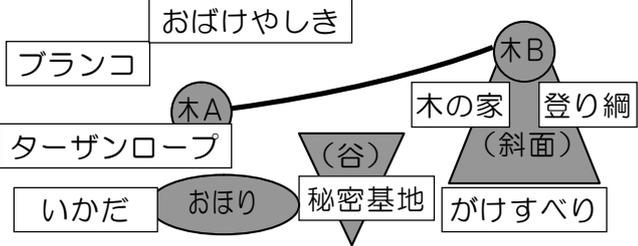
自分が考えたランドの構想や遊具などを、絵や模型を使って言葉で表現することができる。また、1年2組のランド計画に自分の願いや考えをかかわらせていくことができる。

(2) 身をのり出して学び合う子どもの姿

ランドの計画がみんなの考えを重ね合わせてできあがっていく中で、「同じ樹木に複数の遊具は作れないのではないか」「この場所にこの遊具は危険ではないか」等の疑問や問題に気づき、これまでの経験などを根拠にして自分の考えをかかわらせていこうとする姿。また、それが教室で解決できなければ、実際に現地を見に行こうとする姿。

(3) 学習過程

○身を乗り出すための手だて

学習段階	児童の活動	教師の支援
つかむ (10分)	<p>1 年2組の「うっ木っ木ーランド」計画を立てよう。</p> <p>1 自分の考えたランド計画を発表する。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 発表意欲を高めるために、棟梁のツリーハウスの計画も発表の中に取り入れる。 子供たちが教室で、ランドの全体像を見ながら考えて議論しやすくするために、錦の森の地形図を用意する。
深める (20分)	<p>真ん中の木Bには、何を作ろうか。</p> <p>2 今の計画の疑問点や問題点を話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> そんなにたくさん作れないよ。 同じ木にいっぱい作れないよ。 ブランコは、他の木にも作れるよ。 おばけの基地は、木Aと木Bの間が面白いよ。 がけすべりの下におばけ役の子がいると面白いね。 この斜面は急だから、登り綱が面白いよ。 木の家は斜面の反対側に作ればいいよ。 がけすべりと、登り綱はぶつからないように通道路の方向を同じにしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊具を作るのに適した樹木や場所には、複数の遊具の計画が重なるだろう。そこで、一カ所を取りあげ、そこに何を作るのかを話し合わせる。その際、単に作りたいたいという思いだけでなく、これまでの経験や地形、木の形状を根拠に挙げて説明できるように支援する。
まとめる (15分)	<p>3 疑問点や問題点を解決するために、模型を使って場所の話合いをしたり、現地へ見に行ったりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ブランコやターザンロープは、木Cにも作れそうだね。木Aは、家がいいよ。 斜面は、やっぱり登り綱が面白そうだね。 おばけのいる場所はここがいいよ。 	<ul style="list-style-type: none"> 樹木や地形の具体像が分からないために解決できない問題については、実際に現地を見に行くことを促す。

(4) 評価

これまでの経験や地形・木の形状などを根拠にして、ランド全体像や個々の樹木・場所に適した遊具を考え、1年2組のランド計画にかかわることができたか。

15

木はともだち



うっ木っ木ーランドにどんなあそびばをつくらうかな?
なまえ)

つくりたいものなまえ
ひみつきち
どこに (ひみつのどうくつ)

木のかわり

あたしは、いちばんひみつきちがつくりたいです。おおきいひみつきちをつくりたいです。ダイヤぶらんこもたのしか、たけれどわたしは、ひみつちがちからをあわせたからひみつ

ざいりょうとかくわしくかけているね。みんはで力をあわせるということがいいね。



思ったこと・感じたこと

① 職人さんは、後つきがないことか一番の間違ひ点だと思ひます。

② このじ業をやる前にやめてしまった職人さんがほとんどかこのりゆうだと思ひます。

③ 他の職人さんにも楽しい業をしてほしいです。

④ ちうしなどでおしえてあげたい(町の人に)

⑤ ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

<p>11月2日</p>	<p>授業内容 11月2日 自分の職人さんと同じ所が無いと思 っていたけど、以前作った職人さんとして共通なことの 前に作った物より新しい物を作るとおぼろげ</p>
<p>11月</p>	<p>授業内容 白鷹さんの釘作りにかける思い 職人としての思い カカハービや、火死など、11月13日大 事なことが出てきて、職人さんはすごいな と、おぼろげに思った。</p>

授業記録 10月30日(火) 3時間目

本時の活動 みんなの力で「職人さんにしてあげられること」を話しあおう。

話しよく品、作品をわたす。

職人さんのことをせんでんする。(チラシなど)
ポスターをはる。—しやくしまにまかをえる。—ひらくはり

西尾市以外 職人ぼしゅう 西尾の人によひかけ 1 回らんはん
第入りぼしゅう 職人さんのまか

新聞写真 西尾小のホームページ 職人の技 西小のホームページ アクセス数ある どの職人さんも 検索すまて きてくれかい
愛知県 店の場所 2つやる— ホームページ ポスター 生きがい、伝統を守りたい 電車の音

思ったこと・感じたこと

新聞をやるのは、みんなどうって11月13日って人から11月13日、職人さんのためなの
ためすだけじゃ、せまほうか11月13日
お父さんが名鉄のかんけいしやなので、きいてみたいですね。

いいうえがあつたか。
どこに聞いたらいいか、聞いてみた!

社会で生き生きと活動する基礎をはぐくむキャリア教育

－「せともの」をモチーフにした3年間を見通した実践－

瀬戸市立本山中学校

1 はじめに

ニート、フリーターと呼ばれる定職に就こうとしない若者層の増加が社会問題になっている。また、若者の勤労観・職業観の未熟さ、コミュニケーション能力やマナー意識の低下を指摘する声がよく聞かれる。このような情勢を受け、学校教育の中で、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」、すなわち、キャリア教育の必要性が叫ばれるようになった。

国の施策の中で、平成17年度に経済産業省が中心となり、文部科学省・厚生労働省と連携して、「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」が打ち出された。瀬戸市において瀬戸商工会議所のコーディネートの下、市内小中学校と地元産業界が連携し合っこのプロジェクトが進められている。本校も、初年度の平成17年度からこのプロジェクトに参加している。

本校では、キャリア教育を進めるに当たって、そのねらいを、「社会で生き生きと活動する基礎を育む」ことにした。このねらいの下、まず、職業や働くことについての理解を深めさせたいと考えた。さらに、職業や働くことに対して、前向きなとらえ方、積極的な職業観・勤労観をもたせることが必要であると考えた。

2 本校におけるキャリア教育の手だて

(1) 職業人との出会いの場の設定

「社会で生き生きと活動する基礎」をはぐくむという本実践のねらいを達成するために、最も重視したいのは、実際に「社会で生き生きと活動」している方々と生徒が会う機会を多く設定するということである。様々な職業の方々と会う機会をできる限り多く設定し、生き生きと働く職業人の声を聞かせたり、姿を見せたりしたい。そうすることで、具体的に職業や働くことについて理解を深めさせたり、前向きな職業観・勤労観をもたせたりできると考える。

(2) モチーフとしての「せともの」

瀬戸市は古くから続く焼き物の町で、本校学区は、かつて瀬戸の焼き物産業の中心地だったところにある。しかし、1980年代半ばの円高不況以来、焼き物産業は衰退を続けて、現在は廃業した焼き物工場の跡地にマンションが建ち並んでいるという状況である。それでも、地域には、昔ながらの街並みが残り、伝統的な焼き物作りに携わる人も少なくない。また、学区にある名鉄尾張瀬戸駅周辺は近年観光に重点の置かれた再開発が進み、せとものを販売する商店が軒を並べている。そういう地域に位置する本校でせとものを取り上げることによって、次のような効果が期待できると考えられる。

- ・ 「せともの」に関連したいろいろな職業人の方と触れ合える。
- ・ 製造業だけでなく、商業、サービス業など幅広い業種とかがかわれる。
- ・ 生徒の多様な興味や考えを生かした展開が可能である。

このような考えに基づき、本校ではせとものをモチーフにして、キャリア教育を進めていくことに

した。

(3) 3年間を見通したカリキュラムの作成

各学年の特性や進路指導計画などにも考慮しながら、3年間を見通した計画を立てることとした。中学校におけるキャリア教育と言え、2年生で行う職場体験活動が大きく取り上げられる傾向がある。本校では、職場体験もキャリア教育の活動の一つとし、入学から卒業までの3年間で、本校にキャリア教育のねらいが達成できるように計画的に指導していくこととした。

3 キャリア教育の指導計画

(1) 計画の概略

学年	活動名	活動の概要
1年	せともの探訪	・せとものに関連する課題を班ごとに追究し、その成果をまとめて発表する。
	身近な職業調べ	・親や知り合いの人の職業について調べる。
	職業調べ	・興味のある職業を調べるとともに、特定の職業について全体で詳しく調べる。
2年	もとやま工房	・商品になるせとものを企画・製造し、実際に店頭で販売する。
	職場体験	・自分の興味のある職業について、瀬戸市内を中心にして職場体験活動を行う。
3年	上級学校調べ	・自分の進みたい高校・専修学校・職場について調べる。
	生き方講座	・職業人を講師に招き、生き方について講演を聞く。
	コミュニケーション講座	・自分の特性を理解し、アピールする方法を学ぶ。
	卒業記念プレート制作	・せともので卒業記念のプレートを作り、校内に設置する。

(2) 具体的な計画

本校では、主に、総合的な学習の時間に、キャリア教育を行うことにしている。また、学活での進路指導と重複しないように、学活の計画も調整し、内容によっては学活の時間に指導するようにしている。

総合的な学習の時間は、1年・2年で週に2時間、3年で週に3時間設定されている。そのうち、全学年で1時間を国際理解教育に、3年生で1時間を情報処理教育に当てている。したがって、総合的な学習の時間にキャリア教育に取り組めるのは、週に1時間しかない。しかも、その時間に、野外活動や修学旅行、体育祭、文化祭などの行事の準備や練習も行わなければならない。そのため、いろいろな行事との兼ね合いも考慮し、3年間を見据えた綿密な計画が必要となる。

次に示すのが、本校のキャリア教育の年間計画である。これを基に、学年ごとにより詳細な計画を作成している。

[キャリア教育の年間計画]

月	1年	2年	3年
	○キャリア教育オリエンテーション（全校）		
4月	○「せともの探訪」のオリエンテーション	○「もとやま工房」のオリエンテーション ○「もとやま工房」の商品企画	○「卒業後の進路を考えよう」
5月	○「せともの作り方を調べよう」 ○せともの作品の構想スケッチ ○せともの作り	○「会社経営について学ぼう～会社経営講座」 ○「もとやま工房」の会社組織作り	○「上級学校を調べよう」
6月	○せともの探訪調べ学習準備 ○せともの作り（施釉）	○各部署の活動計画 ○「もとやま工房」各部署の事前活動	
7月	○せともの探訪調べ学習 ○せともの探訪のまとめ	○職場体験に向けて	○「上級学校を調べよう」 ○学校見学・職場見学の計画
9月		○マナー講座	○「受験の仕組みを知ろう」
10月		○職場体験に向けて ○職場体験 ○職場体験のまとめ	○「自分に合った進路を選ぼう」 ○生き方講座
11月	○せともの探訪発表会準備 ○せともの探訪発表会 ○身近な職業調べ	○職場体験のまとめ ○職場体験発表会 ○「もとやま工房」準備 ○「もとやま工房」商品製作	○「自分に合った進路を選ぼう」 ○面接試験に向けて
12月	○身近な職業調べ ○身近な職業調べまとめ	○「もとやま工房」商品製作（施釉） ○もとやま工房販売準備 ○「卒業後の進路を考えよう」	○コミュニケーション講座 ○卒業文集制作
1月	○職業調べ ○職業講座	○もとやま工房販売準備 ○販売研修	○卒業記念プレート制作
2月	○職業調べまとめ ○せともの作り【工房試作】	○もとやま工房販売準備 ○もとやま工房販売体験	○卒業記念プレート設置 ○受験に向けて
3月	○「もとやま工房」のまとめ発表会に参加 ○来年度の「もとやま工房」に向けて	○もとやま工房のまとめ発表会	/

*上記表中の水色の項目が、外部から講師を招いたり、校外で調査活動や体験活動を行ったりするなど、校外の職業人の方と接する機会のある活動である。

4 活動の実際

(1) 1年生の活動

1年生のキャリア教育は、その前半に、キャリア教育のモチーフとして据えた、せとものに対する興味をもたせることと理解を深めるための学習「せともの探訪」を行う。実際に自分でせともの作品を作り、せとものを作る面白さを体得させる。そして、成形、素焼き、施釉、本焼きといったせとものを作るための一連の工程を理解させる。その活動の中で、せとものあるいは瀬戸に関連して興味をもったことを課題にして調べ学習を行う。調べ学習の中で、地域で働く人々の姿に触れるようにする。

後半には、職業についての理解を深める学習をする。まず、親や知人といった身近な人の仕事の内容、働く苦勞、喜びなどを調べさせる。次に、特に興味のある職業について調べたり、職業人の方を講師に招いてその職業についての仕事の内容、苦勞、喜びを聞いたりする機会を設ける。

せともの探訪

①「オリエンテーション」

まず、瀬戸の陶芸家を取り上げたビデオを視聴させた。地域に「せともの」の文化・産業があることを再確認するとともに、陶芸家の生き方に関心をもたせた。



②「せとものを作ろう」

せともので動物をモチーフにした置物を作らせた。釉薬^{ゆうやく}もかけ、本焼きもすることにした。せとものを作る一連の工程を理解させるとともに、せとものについての興味を喚起した。

③「『せともの探訪』調べ学習」

せともの作りを実際に行い、せとものあるいは瀬戸について興味をもったことを課題にして調べ学習をすることにした。生徒が設定した課題は、次のようなものである。

「深川神社～^{こまいぬ}狛犬の歴史」 「^{けいさ}珪砂の秘密」 「加藤民吉」 「本山中周辺の和菓子屋さん」
 「招き猫・招く猫」 「陶祖祭」 「ノベルティの歴史」 「名物料理 in 瀬戸」
 「瀬戸のおすすめ料理」 「瀬戸駅の歴史」 「陶器作りの道具について」



生徒は、班ごとに市内で調べ学習を行った。陶土採掘場から産出される、ガラスの原料である珪砂^{けいさ}について調べた班は、実際に採掘場に行き、珪砂がどのようなものであるか説明を聞いた。さらに、珪砂と陶土、普通の土や砂をどのように分類するのか実演で示してもらった。

招き猫について調べた班は、招き猫を作っているせともの工場を見学した。そして、せともの店を回り、いろいろな招き猫があることや招き猫のいわれなどを調べた。

④「『せともの探訪』発表会」

2学期の学校公開日に、「せともの探訪」で調べてまとめたことを発表する発表会をもった。この発表会には、保護者のほか、学区の小学生、地域住民の方を招いた。

生徒は、パソコンを使ってプレゼンテーションをしたり、B紙(模造紙)を使ってまとめたことを発表したりした。



(2) 2年生の活動

2年生の活動の中心に、「もとやま工房」という活動を据える。これは、自分たちでせとものを作り、それを商品として実際に店頭で販売するという活動である。制作や販売の際に、実際にせとものを作っている方、店で商品を売っている方から、その方法を学ばせたい。また、その活動に付随して、会社はどのような仕組みで成り立っているか、販売をどのように宣伝するかなども実際にその関連の仕事をしている人から学ばせたいと考える。

多くの学校で2年生のキャリア教育の中心として行っている職場体験も10月に行う。体験する事業所を選ぶ際、生徒の興味・希望を基にするとともに、「もとやま工房」での役割分担を踏まえ、「もとやま工房」で生かせる仕事にも出掛けるようにする。例えば、宣伝を担当する生徒は、優先的にマスコミ関係の職場体験をさせるなど配慮したい。

もとやま工房

①「オリエンテーション」

生徒は、前年度の3学期に、「もとやま工房」の活動の準備として、自分で使うせともの食器を作っている。自分で自分の作品を使ってみて、「重い」「形が悪い」「口のところが平らになっていないので使いにくい」などの印象をもっていた。

4月、全校でのキャリア教育のオリエンテーションで、前年度の「もとやま工房」の販売風景の写真を見た後、学年でのオリエンテーションで「もとやま工房」で販売した商品を見せた。また、陶器店で売られているせとものを数点提示し、商品としてせとものを作ることへの関心をもたせた。

②「会社組織を作ろう」

学年全体を一つの会社に見立てて、皆で仕事を分担して作業を進めていくことにした。役割を分担する前に、せともの工場の経営者を招いて会社経営の仕組みや心得などを聞く、「会社経営講座」を開催した。会社で考案したせともので作ったのはがきや陶製のノートパソコンを置く台などを持参され、そういう製品が誕生したいきさつや会社内の組織のことなどを話された。

後日、この講座の話をもとに、会社としてどんな仕事が必要かを皆で出し合い、それらをまとめて、経営部、製造部、宣伝部、販売部の四つの部署を設けることにした。



会社経営講座

③「各部署の活動」

製造部の生徒が、商品を企画するために、実際にどんなせとものが売られているか、どのような商品に人気があるのかなどを調べに行くことにした。校区の11軒の陶器店で、商品の調査を行った。また、経営部の生徒は、会社経営講座の講師の方が経営するせともの工場を訪ね、せともの作りに必要な様々な設備・仕事を見学した。

ホームページによる宣伝の方法も教えていただいた生徒もいる。

広報部の生徒は、ケーブルテレビ局、地元FMラジオ局、新聞社を分担して訪ね、「もとやま工房」の活動の紹介をし、取材や広報の依頼を行った。販売部の生徒は、陶器店で商品の並べ方や接客の様子を見学した。



商品調べ

④「職場体験」

10月16日から18日までの3日間、市内を中心に約40か所の事業所に出掛け、職場体験を行った。職場体験をする事業所は、過去に職場体験を受け入れていただいた事業所のリストを参考にして生徒が希望した職種・事業所を基に決定した。生徒は、自分の興味のある事業所を希望する一方で、「もとやま工房」の会社組織に基づき、製造部の生徒がせともの工場で、宣伝部の生徒がNHKや地元のFMラジオ局で職場体験をした。



せともの工場での職場体験

⑤「商品を作ろう」（18年度の実践）

製造部のアイデアを基に、全員でせともの作りに取り組んだ。生徒が考えたのは、湯のみや小皿のほか、陶製のマグネット、写真立て、ペーパーウエイトなどであった。販売部の生徒の用意した図案を基に、製品作りに取り組んだ。講師に地域の陶芸家の方を招き、作り方の指導を受け、全員の生徒で製品作りを行った。

⑥「販売の仕方を知ろう～販売研修」（18年度の実践）

販売日を前に、販売や接客の方法を学ぶために「販売研修」を行った。陶器店の販売員や酒店の経営者の方などを講師として招いた。販売員としての心得を話していただいた後、あいさつの仕方や商品の包み方、お金の受け渡しの仕方などを具体的に教えていただいた。

⑦「販売体験」（18年度の実践）

3月に自分たちで作ったせとものを商品として販売する体験を行った。店を出した場所は、名鉄瀬戸線の尾張瀬戸駅前の歩道である。この販売に先立ち、宣伝部の生徒が送ったこの宣伝用のフリップがNHKの番組で紹介された。また、当日は地元FMラジオ局の番組にも生出演させていただいた。

当日は、生徒の準備した看板を掲げ、本校保護者だけでなく多くの観光客にも来店していただいた。生徒は、先日の販売研修で学んだことを生かし、笑顔で接客に当たった。昨年度は、4時間の販売で、約4万円の売り上げを納めた。

販売体験後、生徒はこの売上金の使途をどうするか何度も話し合った。最終的に、車いすを購入して学校に寄贈することにした。



商品作り



販売研修



販売体験

(3) 3年生の活動

3年生のキャリア教育は、実際の進路選択を目前に控え、中学校卒業後どのような進路があるのかを学び、自分の進路を決めていく活動が中心になる。

卒業後の具体的な進路選択の学習だけでなく、視点を少し遠くに置き、どのように社会で生きていくのかをこの時期に考えさせることも大切である。そこで、「生き方講座」と題して、実際に社会で活躍してみえる職業人の方を講師に招き、その生き方について話を聞く機会を設けることにした。また、自分に対する理解を深め、人と円滑にコミュニケーションをとる方法を学ぶ機会も設けた。

最後に、1年生の時から取り組んできたせともの作りのまとめとして、卒業記念に思い出のメッセージを記したせとものプレートを作り、校内に卒業記念品として設置することにした。

生き方講座

「生き方講座」は、市民講師の方を講師に招き、それぞれの人生について語っていただくものである。新聞記者、和菓子職人、アナウンサー、市役所職員、美容師、レング会社経営者の6名の方にお越しいただいた。その仕事に就きたいきさつや仕事のやりがい、苦労などを話していただいた。生徒は、次のような感想を書いた。



和菓子職人の方の講座

○最初は特に考えがなくてやってみても、いつかはしっかりとした芯をもつことができるんだと少し安心しました。私には、今、特に決まった夢や希望はありません。将来どうなっていくのか全く分かりません。しかし、これから出会う人との交流を大切に、何事にも一生懸命取り組んで経験を積んでいきたいです。

○僕はまだ15歳で夢も見付けておらず、困っていました。でも、講師の皆さんのおかげで、これから夢を見付けるチャンスが何回も訪れることに気がきました。講師の皆さんの話を聞いて感動しました。皆さんが今日までに、くじけず、あきらめずに夢に向かって頑張ってきたのを知り、すごいなと思いました。どんなことでもあきらめなければかなうんだと思いました。

卒業記念プレート作り (18年度の実践)

①「卒業記念プレートをデザインしよう」

本校では、数年前から卒業記念として、思い出を記したせとものプレートを作り、校内に設置するという取組をしている。過去の卒業生が残っていた、プレートを参考にしながら、自分のプレートのデザインを考えさせた。

②「プレートを作ろう」

自分で考えたデザインを基に、陶芸家の指導を受けながらプレート作りを行った。生徒は、卒業の記念になる言葉を考え、それを立体的に表現した。

③「プレートを設置しよう」

施釉^{せゆう}、本焼きを終えた作品を校内に設置する作業を行った。昨年度は、運動場のスタンドに設置することにした。全員のプレートを合わせて、「本山」という字を作った。後日、校長を招き、学校に対する贈呈式を行った。



完成したプレート



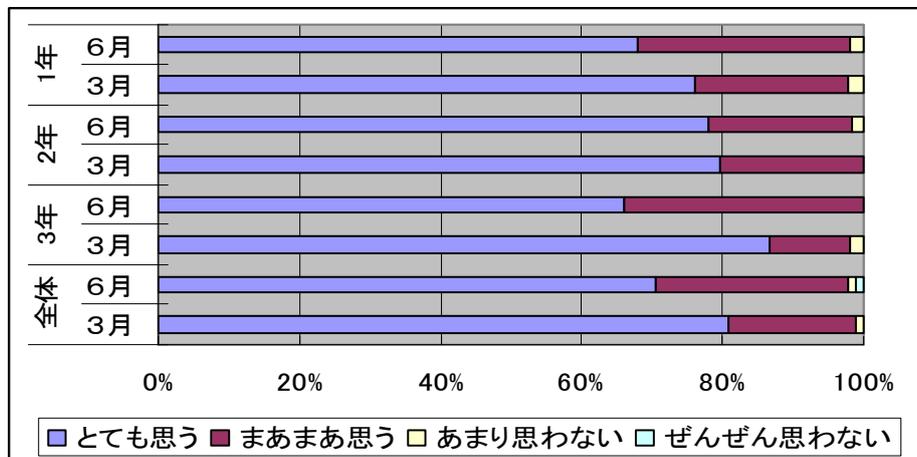
設置したプレートを囲んで

5 まとめと今後の課題

本実践のねらいは、職業や働くことについて理解を深めさせること、さらに、職業や働くことに対して、前向きなとらえ方、積極的な職業観・勤労観をもたせることである。

その成果を評価するために、生徒の職業観の変容を見ることにした。昨年6月と3月に意識調査を行った。ここでは、生徒が将来働きたいと思うかどうかについての調査の結果を検討したい。

〔「将来働きたいと思うか」という質問に対して〕



本実践を行う前の6月では、「とても働きたいと思う」という生徒が70%であった。それが3月には81%に上昇した。「とても働きたいと思う」と答えた生徒の割合は、どの学年も上昇しているが、3年生は66%から86%に大幅に上昇した。本実践の成果としてこのように就業意欲、勤労意欲が高まったと考えたい。

どんな仕事に就きたいかという質問に対して、ほとんどの生徒が「やりたい仕事」「自分のよさを生かせる仕事」を選んだが、「もうかる仕事」「楽な仕事」を選ぶ生徒も増えた。これらの観点も就業の観点として否定できないが、より積極的な職業観・勤労観をもたせるために、生きがい、やりがいあるいは働く喜びのようなものに触れさせる機会をより多くする必要があると思われる。

本論で述べたように、本校では、せとものをモチーフにしていろいろな職業・仕事に対する理解を深める活動に取り組んできた。3年間の指導計画を立て、学年に応じて計画的にキャリア教育を実践してきた。今年度の実践がそうであったように、今後もよりよい実践を目指して、前年度の活動内容を踏襲しつつ、それを見直し・改善していきたい。

キャリア教育と「産業社会と人間」

愛知県立蒲郡高等学校

1 はじめに

(1) 本校の概要

本校は1学年6学級の全日制総合学科（平成15年度より総合学科）である。「勤勉・礼節・自律」という校訓の下，地元の人に愛され親しまれ，知・徳・体共に整った高校生の育成，日進月歩の社会の発展に対応し，寄与できる人材の養成を目指している。そして，生徒たちの夢をはぐくみ，個性を育て，「これまで」よりも「これから」を重視し，生き生きと活躍でき，自分たちの可能性を拓くことのできるチャレンジスクール（自分にチャレンジする）を目標に頑張っている。卒業後の進路先については，大学短大進学90名程度，専門学校進学60名程度，就職80名程度であり，多様な進路先に対応している。

(2) 産業社会と人間

「産業社会と人間」は総合学科における原則履修科目として1年次に全員が履修しており，週2単位実施している。授業担当は，1クラスを正副担任の2人で行い，それぞれ20名ずつ担当している。授業内容は，自己理解・職業理解・学問理解・将来設計（ライフプラン）をキーワードに自分史作成や発表，職業人インタビュー，適職適学進路適性検査，外部講師講話，科目選択ガイダンス，進路研究，そしてライフプラン作文作成等，進路希望にかかわらず全員対象に実践している。なお，授業ごとにワークシートを用意し，提出させており，その毎時間のワークシート（指導案を含む）は学校独自の教材として作成したものを使用している。

(3) 学校全体の取組

進路指導部による学年別進路指導を始め，1年次の「産業社会と人間」，2年次・3年次の「総合的な学習の時間」を通して，将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深める学習や生徒の興味・関心，個性を生かした科目選択（指導）や主体的な学習を重視し，多様な能力や適性の伸長を目指し柔軟に対応している。また，社会体験学習（インターンシップや実習体験），ボランティア活動，地域貢献活動を広く生徒に奨励し，普段のあらゆる学校行事や教育活動を通して，キャリア教育の推進を図っている。

2 本実践のねらい

本校生徒（総合学科生）の入学時の進路希望は例年，進路希望未定の者の割合が全体の2割を超えている。今年度においては，4割近い数字になっている（資料1）。その現状を踏まえ，「産業社会と人間」の授業において入学当初にオリエンテーションとともに適職適学進路適性検査を行っている。この検査は，職業人2万人のデータベースを基に，自分と似た価値観・興味・志向をもった人が実際にどのような仕事や学問の分野で活躍しているかを分析し，自分に合った仕事や学問は何かを考えるきっかけを提供する検査である。

この検査の客観的な結果を基に，授業では「自己理解」「理解」「学問理解」について深く学び，調べていく内容になっている。「世の中にはどのような職業や学問がある

【資料1 本校生徒の入学時進路希望】

	H17	H18	H19
大学	42	44	41
短大	22	32	30
専門学校	74	52	46
就職	51	38	33
未定	47	74	89

のか」「その職業に就くためにはどのような学部学科に行けばよいのか、どんな学校を選べばよいのか」など自分の将来に向けての方向性を見出すことを大きな目的としている。そして、自分の進路についての明確な目標設定を行い、その進路に応じた科目選択、または、興味・関心に応じた科目を選択・決定していくとともに、高校3年間の目標設定、高校卒業後の将来設計（ライフプラン）についても自らの考えをまとめ、その実現に向けて主体的に取り組むことをねらいとしている。（資料2）

【資料2

「産業社会と人間」のイメージ】

将来設計（ライフプラン）	
科目選択	
職業理解	学問理解
自己理解	

3 実践の実際

(1) 「産業社会と人間」の年間計画

学期	目的	月	学習テーマ（配当時間）	学習内容
1	自分及び	4	進路適性検査受験 (2)	進路適性検査受験
			新入生オリエンテーション (2)	蒲高ガイダンス 担任面接資料、自分史作成資料配付
			自分を知る〈自己理解〉 (1)	自己理解、性格やパーソナリティの傾向を知る
			自分史作成発表〈自己理解〉 (2)	自分史のワークシート作成。クラス内発表
	職業を知る	5	職業を知る〈職業理解〉 (1)	教材を用いて「働く面白さ」について学習
			学問を知る〈学問理解〉 (1)	教材を用いて職業・資格の種類と上級学校の調べ学習
			適性検査結果と自己理解 (1)	検査結果を用いてワークシート作成
			適性検査結果と適職・適学 (2)	検査結果を用いてワークシート作成
			合同進路講話 (1)	昨年度の進学・就職実績から学ぶ
	系列を知り選択科目	6	系列・科目オリエンテーション (1)	系列の考え方・科目履修計画作成のための科目説明
			卒業生講話 (1)	進学・就職した卒業生の講話
			選択がイグダンス／進路学習 (1)	1年次各選択科目のガイダンス
			履修計画作成がイグダンス (1)	2・3年選択履修計画の立て方についての全体説明
			保護者会	1年次選択科目仮登録・進路希望調査
			2・3年選択がイグダンス (2)	2・3年次各選択科目のガイダンス
			系列進路希望調査 (1)	系列希望調査の実施
			大学企業見学事前学習 (1)	大学又は企業見学の事前学習。
	目考察	7	履修計画作成作業① (1)	科目選択がイグダンスを用いて3年間の履修計画を立てる
			履修計画作成作業② (1)	科目選択がイグダンスを用いて3年間の履修計画を立てる
			履修計画作成作業③ (1)	履修計画再考、原案作成
		8	2・3年次科目選択指導	1年次選択科目本登録、2・3年次科目選択仮登録

2	自己 現 の	開講予定講座発表／調整	(1)	希望状況の説明，再検討の日程説明，調整	
		夏休み課題発表	(2)	職業人インタビューのクラス内発表	
		外部講師講話	(1)	進路専門家によるパネルディスカッション式講話	
	た	9	進路研究①	(1)	就職，上級学校について学ぶ
			進路研究②	(1)	各進路別の指導の流れについて学ぶ
	め の 科 目	10	外部講師講話(1)	(1)	「働く意味と目的」について
			進路研究③	(1)	履歴書，志望動機書，小論文の形式について学ぶ
		小論文指導①～④	(4)	文章の書き方，文章要約，自分の意見の論理的な記述	
		科目調整指導			
	選 択		外部講師講話	(2)	市民講師による職業講話
			小論文⑤	(1)	課題小論文（論述）を書く
	将 来 の 夢 の ま と め	11	保護者会		最終的な選択科目調整
外部講師講話			(1)	「キャリアデザイン」と自分の生き方	
12		ライフプラン作成①～④	(4)	進路計画を発展させ，夢実現に向けどのように取り組むのかを計画，作成する	
		ライフプラン冊子作成⑤～⑦	(3)	ライフプラン（生涯にわたる人生設計を論理的に論述）の清書，冊子としてまとめる	
3	1	ライフプラン作成冊子製本	(1)	冊子製本作業を行う	
		ライフプラン クラス発表	(2)	クラス内で各自のライフプランの発表	
	2	産業調査学習①②	(2)	修学旅行（2年次5月北海道）の産業・歴史調査学習	
		産業調査学習③	(1)	修学旅行（2年次5月北海道）の産業・歴史調査学習	
	3	ビデオ学習	(1)	「自立と職業」をテーマにしたビデオ学習	
		外部講師講話	(1)	「夢へ向かって努力しよう」講話を通じて学ぶ	
		ライフプラン学年発表会	(2)	学年代表による発表と1年間の総括	
	3	反省とまとめ	(1)	1年間のまとめ，アンケートや感想文	

(2) 評価方法

「産業社会と人間」の学習活動の評価については，教科のように試験を行うのではないので時間ごとに提出するワークシートや報告書（課題）を含めた提出物，発表内容（資料3），そして授業に取り組む態度等を総合的に判断し，5段階評価をしている。なお，各個人用の専用のファイルを配付し，毎時間のワークシートはいつでも自分で確認できるように，すべてファイルに閉じて保存するようにも指導し，徹底させている。

【資料3 生徒によるプレゼンテーション】



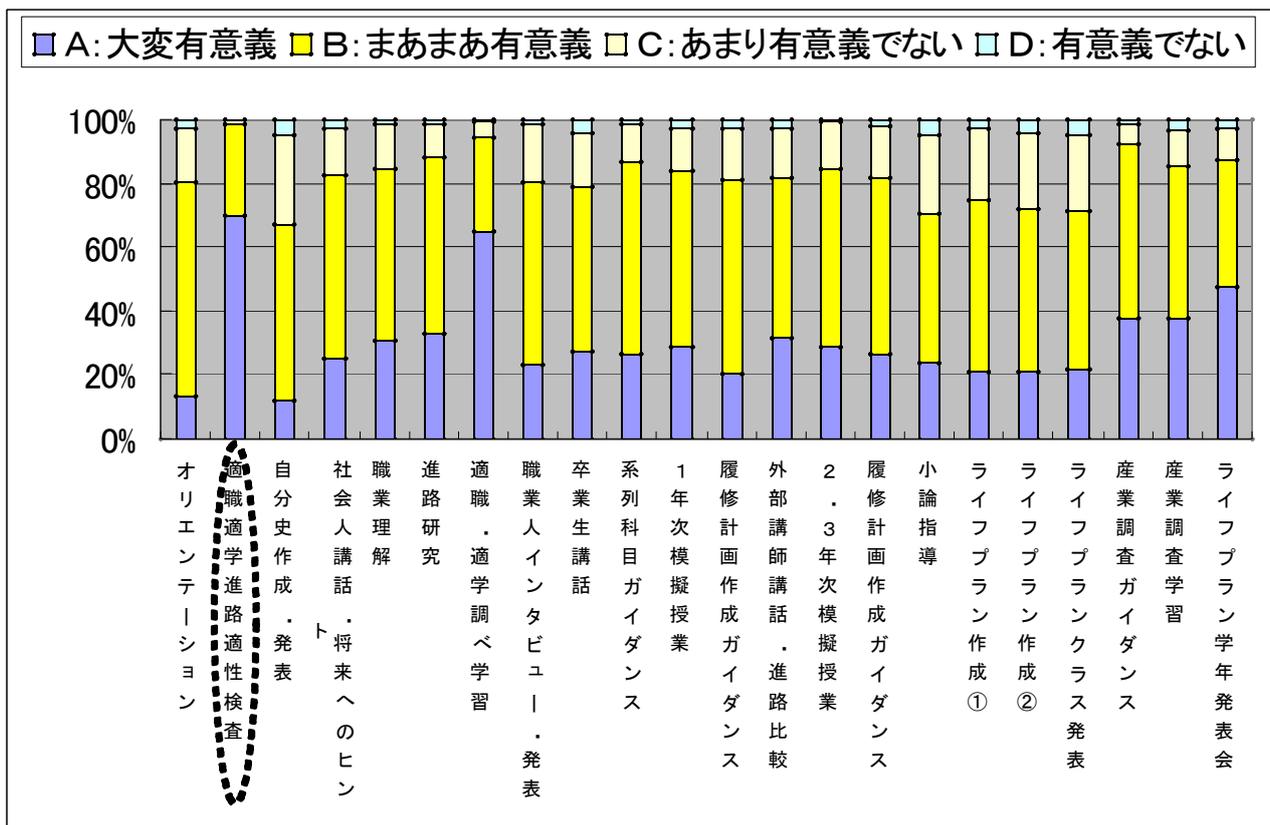
4 考察

平成16年度入学生（今春の卒業生・総合学科2回生）の「産業社会と人間」のアンケート（234名分）と生徒の進路希望の変化について考察してみた。

(1) 「産業社会と人間」アンケートの結果について

ア 調査方法 「産業社会と人間」の授業内容について、選択肢（大変有意義、まあまあ有意義、あまり有意義でない、有意義でないの四択）より一つを選択する方法で行った。

イ 調査結果



ウ 考察

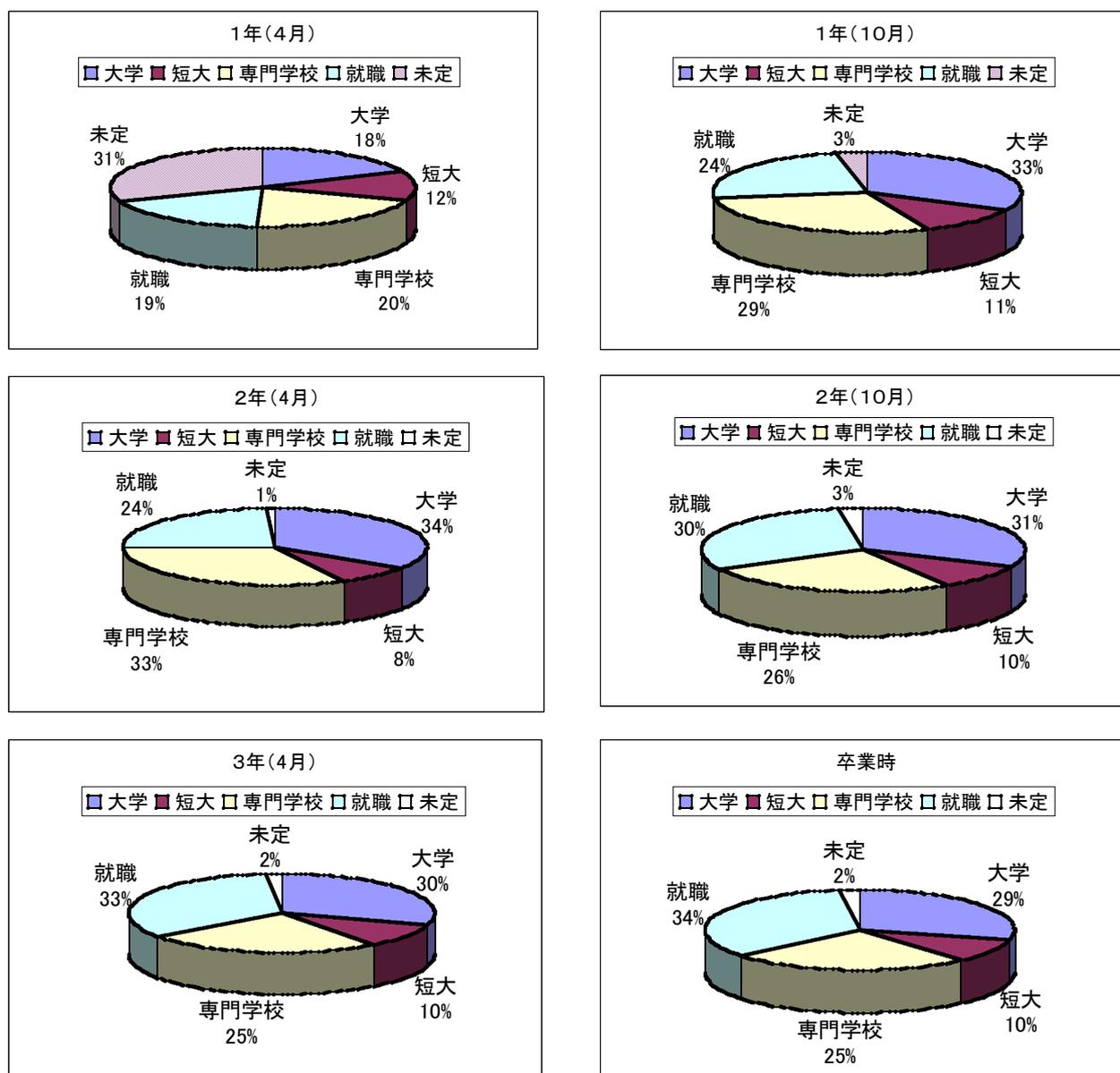
どの学習テーマについても7割から8割の生徒が、「大変有意義」又は「まあまあ有意義」と評価している。特に一番評価が高かったテーマは、適職適学進路適性検査にかかわる内容であり、約7割が「大変有意義」と評価し、「まあまあ有意義」を含めると実に9割以上であった。適性検査の診断結果を受けて、自己のパーソナリティー、職業希望、学問希望を自己分析し、今まで気付かなかった適性や可能性を知ることができた証^{あかし}であると思う。逆に評価が低かったテーマは、自分史作成・発表、小論文指導、ライフプラン作文作成などじっくり考えてまとめることや「書く」作業が中心になること、発表する内容等であった。しかし、評価が低いと言っても、6割以上の生徒は有意義と答えており、全体を通じて各々の学習テーマの趣旨をよく理解し、積極的に取り組んでいたことが分かる。

(2) 進路希望の変化について

本校では、進路希望調査を年に2回、4月と10月に定期的に行っている。平成16年度入学生の進路

希望が「産業社会と人間」の授業を受けて、どのような進路希望の変化があったのかを調べてみた。

ア 変化の様子



イ 考察

入学当初、進路未定で入学してきた生徒は、全体の31.6%（74名）であり、単純に3人に1人が進路希望未定で本校に入学していることになる。1年次の第2回目（10月）の進路希望調査では、進路未定であると回答した生徒は激減し、3.4%（8名）という結果であった。その時点での自分の進路の方向性を見いだせていることが分かる。推移を見ると、大学進学希望の割合が増え、専門学校、就職のそれぞれにほぼ同じような割合で進路希望が移動していることが分かる。しかし、将来について真剣に考えれば考えるほど悩みや不安は大きくなるもので、数は少ないが進路希望を明確に確定できない生徒や進路希望が流動的な生徒もいるのも事実である。2年次、3年次の進路希望については、多少の希望の変動はあるものの、大きな進路希望の変化はあまり見られなかった。「産業社会と人間」の授業を受けて進路の目標を設定する1年次の希望が2年次、3年次への進路希望につながっており、多くの生徒が学年進行でそれが確認されていく過程がよく分かる。

5 成果と課題

(1) 成果

学習指導要領の総則に、総合学科の特色として、次のように記載されている。

- ①将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること。
- ②生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること。

この特色を生かす象徴となる科目が、正に「産業社会と人間」である。平成15年の総合学科立ち上げの際に、この「産業社会と人間」の授業をどのようなねらいをもって、どのように展開していくのか、会議を積み重ねた経緯がある。その中で、本校総合学科の目標である生徒の夢をはぐくみ、個性を育て、自分の可能性を拓くことのできる（自分でチャレンジできる）学校、また、その生徒にふさわしい、計画性のある内容として、「自己理解」「職業理解」「学問理解」「将来設計」というキーワードが生まれた。前述のとおり、時間ごとの指導案やワークシートは本校独自のものである。そのキーワードの下、単発的な計画や指導ではなく、1年間を通した計画性のある内容、指導であり、適職適学進路適性検査を柱に、進路目標を明確に定め、高校卒業後の将来設計までイメージさせるという点が特徴的なところである。

実際の授業での留意点としては、書くこと、聞くこと、発表すること、コミュニケーションを大切にすることを基本とし、生徒の自主性・積極性を重んじ、明るい雰囲気大切にしながら指導を行っているが挙げられる。前述の授業アンケートにもあるように、生徒はこれを有意義であると感じ、高い評価を与え、受け入れている。「産業社会と人間」のねらいの通り、生徒がこの授業に主体的に前向きに取り組むことで、自己理解を深め、周囲や仲間とのコミュニケーションの機会をもち、互いに協力し望ましい人間関係を築くことができている（自分史作成・発表、適職適学進路適性検査自己分析等）。また、進路や職業、学問等に関する情報収集や調査学習から自分の進路の方向性を見だし、必要な情報を選択し、活用する姿勢も身に付けている（職業人インタビュー・発表、外部講師・卒業生講話、職業理解、学問理解、進路研究等）。そして、目標とすべき進路や将来を考え、その実現のための進路計画を立て、自らにふさわしい選択や決定を自ら決断・実行することで、将来の目標とする職業の職業観や勤労観を育てることに役立っている（系列科目選択、履修計画作成、ライフプラン作成・発表等）。

生徒の学校生活の面においても、総合学科への改組以前は、1年生で部活動を辞めてしまう生徒が多かったが、現在は多くの生徒が部活動に参加しており、部活動は3年間継続して行うものであるという意識も芽生えつつあり、学校生活の一部として定着している面も見逃せない。さらに、学校行事においても、文化祭や体育祭に積極的に協力する生徒も増加しており、参加するのが当然であるという雰囲気ができつつあるようにも感じる。集団の中での自分の役割を理解し、前向きに行動し、実行していく力も身に付いてきている。これらの実態は、総合学科が目的としている特色にふさわしいものであり、かつ、キャリア教育の内容を体験的に高め、そして、深めていると言っても過言ではない。

(2) 課題

ア 授業準備に関わる課題

「産業社会と人間」の科目の特性上、事前にその授業におけるねらいや目標、時間配分など指導案に沿って、担当者で共通理解し、授業内容がぶれないように確認する必要がある。毎週火曜日に打合せ会議を行っている。当初はこの会議を週に2回行っていたこともあり、非常に労力が必要で、部活

動（顧問）への影響が心配された。最近でこそ、「産業社会と人間」を担当した先生方も多くなり、要領も得て会議の時間を短縮することができるようになった。しかし、できるだけ会議を少なく、効率よく打合せを行いたいが、初めて担当する先生方もいるので、担当者によって大幅に内容が異なったり、ねらいや目標がぶれないようにするための配慮は必要である。

イ 授業内容、評価にかかわる課題

「産業社会と人間」の授業に関して、毎年生徒のアンケートと反省及び担当者の反省を行っている。その反省を生かしつつ、ねらいや目標を明確にした内容を精選し、改良を加えて、生徒の実状に合った内容を盛り込んでいく必要性も感じている。また、評価については、現在のところ、時間ごとに提出するワークシートや報告書（課題）を含めた提出物、発表内容、そして授業に取り組む態度等を総合的に判断しているが、さらに、明確な評価規準づくりが必要である。

ウ その他の課題

生徒の実状に合った授業内容はもちろんのこと、現状を考えると、高校に入学した当初は、今後の学校生活の目標や進路目標を明確に設定できるように配慮していくことが必要である。さらに、科目選択の流れもあり、難しい側面もあるが、進路の方向性については、最低でも1年間かけてじっくりと考えさせて、納得して進路選択、科目選択をさせるべきで、結論付けを急ぐことは好ましくないと実感している。ただ、中には将来設計立案の際に、現実的でない計画を考える者も少なくない。現実との距離感を理解させ、生徒の進路希望をソフトランディングさせていくことの必要性も感じている。加えて、1年次の「産業社会と人間」で進路希望（夢）をはぐくみ、2年次、3年次の「総合的な学習の時間」へ引き継ぎ、関連付けて指導していくことも大切な観点であると思う。最後に、「産業社会と人間」の授業で、夢をはぐくみ、具体化させていく上で実現に向けての実践や各個人なりの努力目標を設定させ、一步一步着実に進んでいくことの大切さを実感させることも重要であり、それがキャリア教育の眼目でもあると考えている。また、キャリア教育に関する国及び県の指定事業を機に、キャリア教育のより一層の推進を図っていくことも大きな課題である。

高等学校普通科におけるキャリア教育の推進

1 はじめに

関係大臣連名による「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」（平成16年12月）に代表される、系統的なキャリア教育が実施されるよう推奨され、また、その後の中学生を対象とした「キャリア・スタート・ウィーク」等により、職場体験が一層推進された状況の中で、次の発達段階である高等学校でのキャリア教育の全国的な実情を見ると、特に普通科における取組は十分ではない。

文部科学省は「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議（報告書）」（平成18年11月）で、高等学校の7割を占める普通科におけるキャリア教育の在り方についての提言をまとめたが、十分には浸透していない。

ここで、今一度、高等学校普通科におけるキャリア教育の推進にむけた取り組み方の一例を示したい。

なお、研究協力員には高等学校普通科に所属する者がいないため、実践事例を紹介することができないので、ここでは、キャリア教育の実態の把握、キャリア教育の目標設定、キャリア教育推進の手法について述べていく。

2 高等学校のキャリア教育の実態

児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる「キャリア教育」が提言されてから5年ほど経過した。高等学校普通科で、キャリア教育をどのように認識しているかについて以下のような回答が得られた（資料1）。

【資料1 「2006年高校の進路指導に関する調査」(株)リクルート 全国の高等学校813校の回答から作成 複数回答可】

質問項目	%
生徒にとって有意義だと思う	50.6
学校現場で浸透するかどうかは未知数	43.5
提唱されている内容どおりに現場が取り組むとしたら、教員の負担は相当大きくなりそう	35.5
望ましい進路指導が実現できそうな期待がもてる	29.8
進路指導や職業教育と「キャリア教育」の違いが分からず、主旨がみえない	20.7
今は注目されているが、「キャリア教育」という言葉も内容もいずれ忘れ去られると思う	10.5
「キャリア教育」において教員が果たすべき役割がみえない	8.6
「キャリア教育」の意味が分からない	5.2
無回答	2.2

「学校現場で浸透するか未知数」、「提唱されている内容どおりに現場が取り組むとしたら、教員の負担は相当大きくなりそう」という否定的な回答が多い点は見逃すことができない。また、高等学校普通科での実際の実況はどのようなものであるかを見ると、以下のとおりである（資料2）。

【資料2 「2006年高校の進路指導に関する調査」(株)リクルート 全国の高等学校813校の回答から作成 複数回答可】

質問項目	%
キャリア教育の意味を生徒に伝えている	29.3
キャリア教育について組織的・体系的な指導計画を作成している	23.9
キャリア教育推進のため、学校と地域や民間企業との連携を強めている	16.4
キャリア教育に関する文部科学省や教育委員会などの資料・テキストを教員に配付している	18.6
キャリア教育について新しい学習プログラムを作成している	13.4
キャリア教育の概要や推進方法に関する研修会・勉強会を実施している	12.9
無回答	25.3

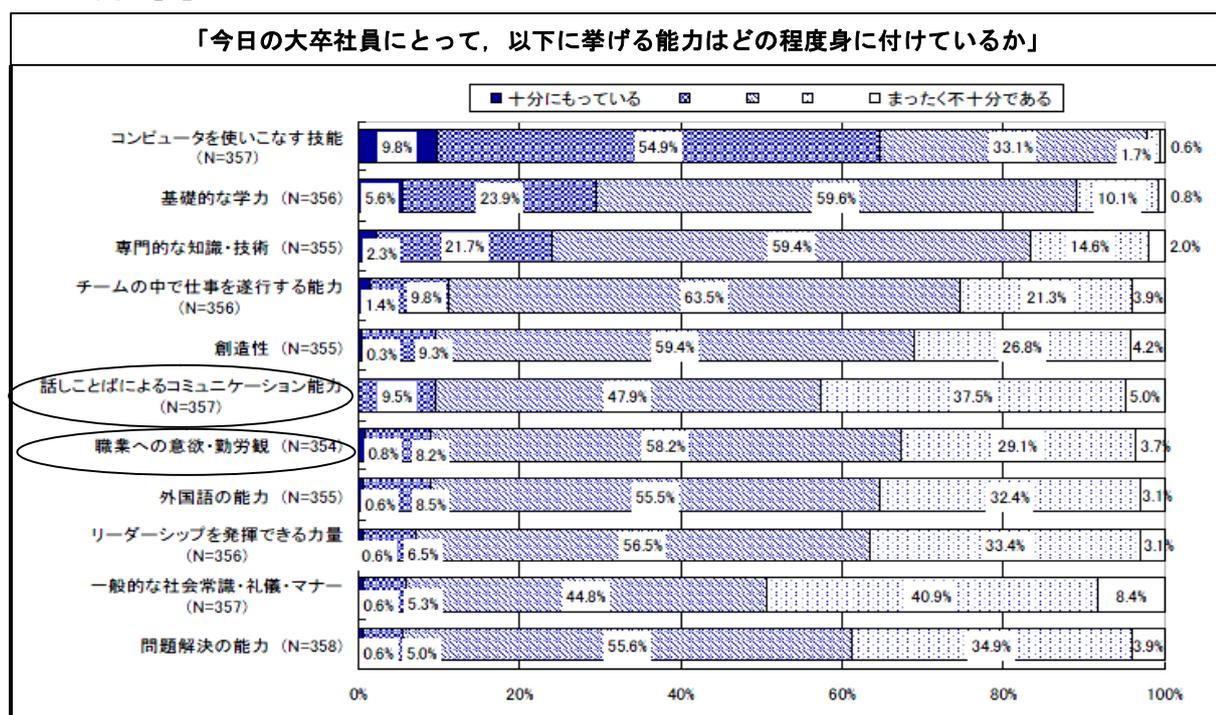
無回答を除く約75%が何らかの形でキャリア教育に取り組んでいることが分かるが、その取組状況は様々で、積極的とは言えない。

また、普通科におけるインターンシップ(就業体験)は、文部科学省の調査研究ではキャリア教育推進の有効な方策として示されているが、その実施率は44.2%で、他の学科に比較して、かなり低くなっている。また、体験日数についても、1日が35.2%、2~3日が54.1%と短期間という状況である(「平成18年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査」国立教育政策研究所)。

大学卒業後の実態については、全国の高等学校の大学進学率は52.3%(愛知県高等学校普通科は70%)であるが、全国の大学卒業生の12.4%、短期大学卒業生の10.3%は進学・就職もしていないのが現状である。これは、高等学校における学力偏重指導、いわゆる、出口指導で「入れる」大学等を選んだり、職業について考えることを先送りしたり、無目的に大学に入学したが適応できなかったり、ということが考えられる。

大学卒業生の能力・資質の実態については、国立教育政策研究所が平成16年に調査し、「地域における経済団体等の人材育成事業及び大学等との連携に関する調査」(資料3)で報告している。

【資料3 国立教育政策研究所「地域における経済団体等の人材育成事業及び大学等との連携に関する調査」】

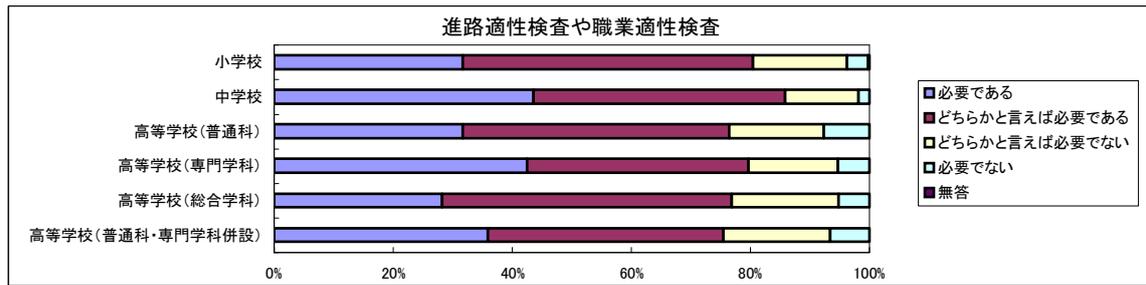


全国の377の地域経済団体等の「今日の大卒社員にとって、以下に挙げる能力はどの程度身に付けているか」を尋ねた問の集計がこのグラフ（資料3）である。一見して明らかなが、「職業への意欲・勤労観」, 「話し言葉によるコミュニケーション能力」には極めて厳しい評価が与えられている。

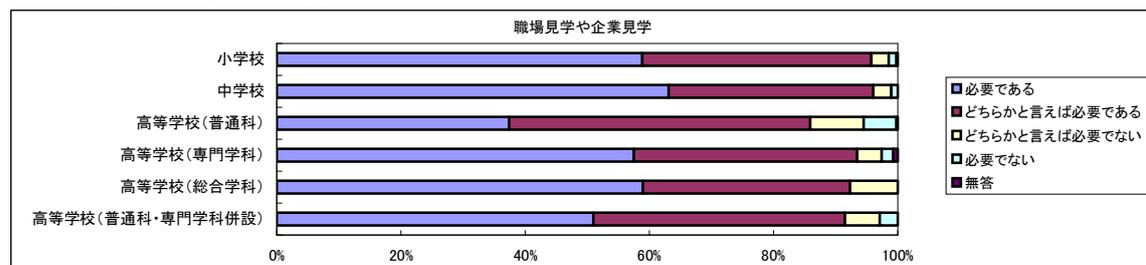
このような実態を踏まえ、本研究は平成18年度に「キャリア教育推進に関する調査研究」にかかわるアンケートを実施した（資料4）。校種別にキャリア教育に対する取組の必要性について尋ねた結果を以下に示す。

【資料4 アンケート】

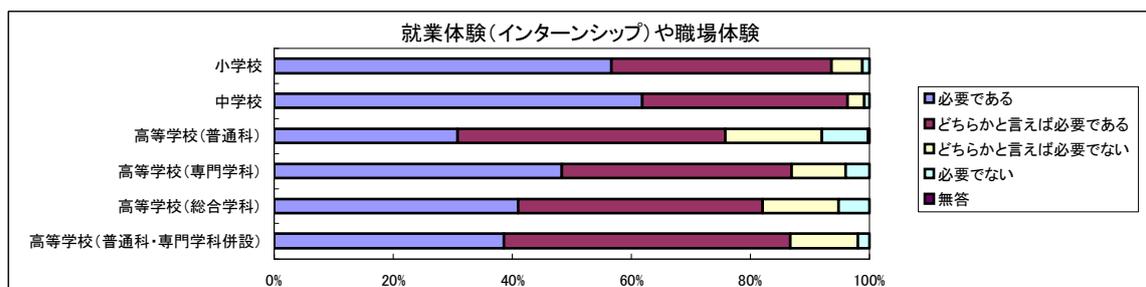
ア 校種別に見るキャリア教育の取組



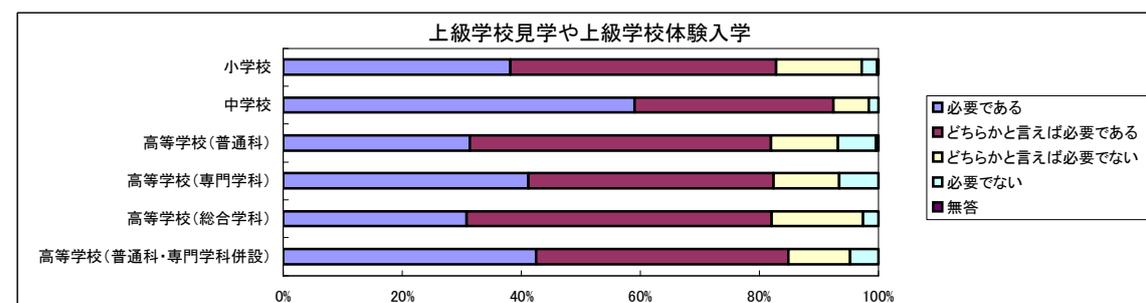
高等学校の普通科や総合学科では低い割合となっているが、進学に関する模試なども設問に含まれていれば割合は高くなったのではないかと考えられる。



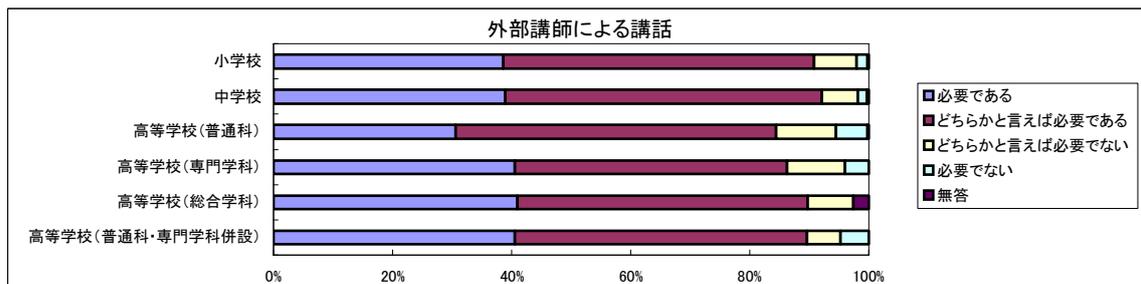
「職場見学や企業見学」の必要性について、「必要である」を選んだ割合で最も低かったのは高等学校(普通科)の37.3%であった。



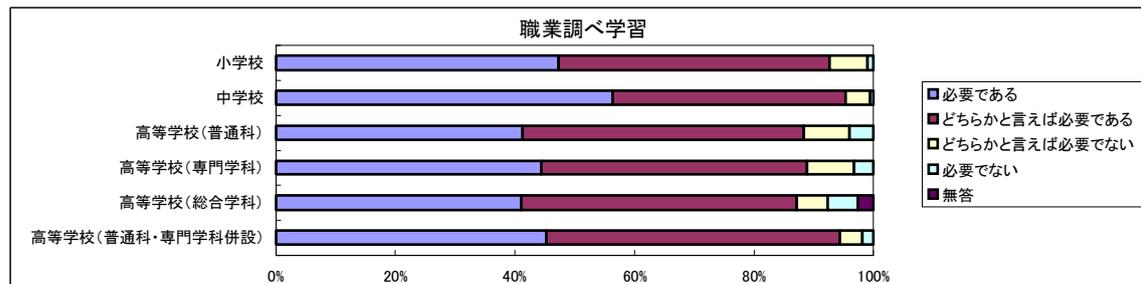
「就業体験(インターンシップ)や職場体験」の必要性について、高等学校では小学校、中学校と比較して肯定的に考えている教員の割合が低い。



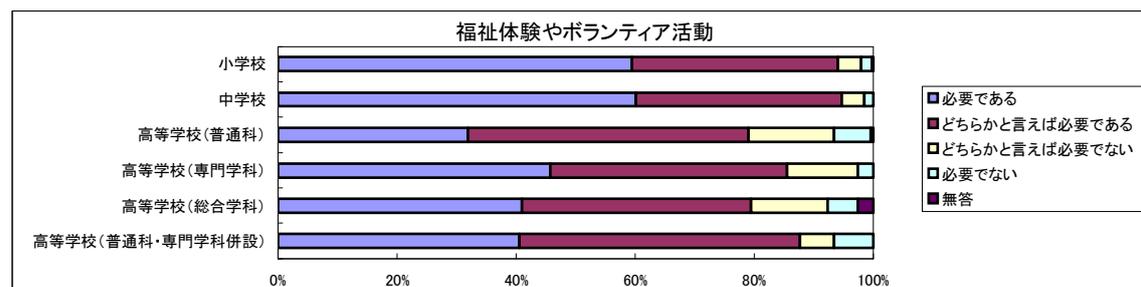
「上級学校見学や上級学校体験入学」の必要性について、「必要である」を選んだ割合で中学校が59.0%と極めて高い割合を示している。



「外部講師による講話」の必要性について、高等学校（普通科）では「必要である」を選んだ割合が30.6%と低い。



「職業調べ学習」について、「必要である」を選んだ割合で中学校が56.4%で他の校種と比べて高くなっている。



「福祉体験やボランティア活動」の必要性について、高等学校では小学校、中学校と比較して肯定的に考えている割合が低い。高等学校（普通科）では31.9%となっている。

キャリア教育の取組の必要性に関して、小学校や中学校、あるいは、高等学校（専門学科、総合学科）と比べると、高等学校（普通科）の数値がやや低いが、どの調査項目に対しても肯定的な回答の「必要である」と「どちらかと言えば必要である」を足した数値は70%を超えている。つまり、キャリア教育の意義・必要性は認識しているが、何らかの障害のために、その取組が不十分であると推測できる。

このような認識の基づき、高等学校普通科で、生徒が将来における社会参加を視野に入れ、大学進学の意味を理解し、目的をもって様々な活動に取り組むことができるよう、キャリア教育を一層推進・充実させるための方策を提案する。

3 高等学校普通科でのキャリア教育の目標

各学校がキャリア教育に取り組むに当たっては、生徒が、小・中・高等学校の各発達段階にあつて、どのようなキャリア発達上の課題を抱えているか、それを達成するために、どのような能力・態度を育成することが期待されているのかを理解するとともに、発達課題と育成すべき能力・態度とが、どのように関連しているかを理解する必要がある。

各学校がキャリア教育を推進するに当たっては、計画の立案に先立って、生徒の生活や意識あるいは家庭、地域の実態などから、自校の生徒のキャリア発達を促す上で、何が課題か、どのような能力・

態度の育成に重点を置くべきかなどを検討し、自校の生徒に育成すべき「能力・態度」に焦点を絞った、自校用のキャリア教育の「学習プログラムの枠組み」を作成することが考えられる。

学校の教育目標が、それぞれ異なるのと同様に、各学校におけるキャリア教育での目標も実態に即して、自由に創意工夫を凝らして作成すべきものである。特に、高等学校普通科では、大学進学を積極的に目指す生徒が多いため、このことを考慮することは極めて重要である。

平成14年11月国立教育政策研究所は調査研究報告書「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」の中で「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」を示し、児童生徒の育成すべき態度・能力を明らかにした。ここでは、「4領域8能力」がすべて同等であるように例示されている(資料5)。

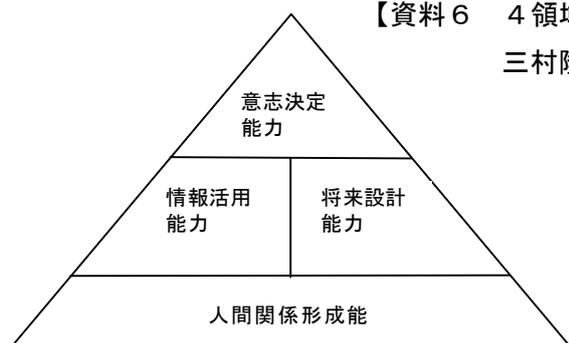
【資料5 職業的(進路)発達にかかわる諸能力】

職業的(進路)発達にかかわる諸能力		
領域	領域説明	能力説明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適應するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力

しかしながら、「4領域8能力」の相互関係は明らかではない。それらが、単に並列であるのか、能力間に上下関係があるのかは示されていない。

【資料6 4領域の相互関係】

三村隆男 上越教育大学准教授の説から作成】



ここで、「4領域8能力」の相互関係について、それぞれの能力を精査していくと、最も基本的な能力は、コミュニケーション能力であり、4領域の構造化を試みれば、コミュニケーション能力を含む人間関係形成能力が最も基礎となる領域である（資料6）。

生徒のこれまで育ってきた環境が大きく変わり、以前なら自然に身に付いていた社会人としての基礎的な力であるコミュニケーション能力が身に付かなくなっている。家庭や地域に教育力があつたころは、あえて言わなくても高校生ならばコミュニケーション能力を自然に身に付けていたが、今は意図的な仕組みを取り入れなければ育たなくなっている。

キャリア発達の観点から高校時代をとらえると、高校生が小学校、中学校で経験してきた様々な学習や体験の上に、更に新たな学習や体験を積み重ね、自分の能力や適正を吟味し、将来設計を立て、現実的な進路選択をするのがこの時期である。よりよい進路選択を可能にするために、親や教師をはじめとする大人や同年代の友人の考えや意見等に耳を傾け、様々なアドバイスを受容しながら、自らの価値観を明確にしていくプロセスが発生するが、ここでコミュニケーション能力、特に、話すこと、聞くことが重要な役割を果たすことになる。

また、就職試験での面接、昨今の大学等の入学試験の多様化に伴う面接試験の増加、大学等での授業で実施するプレゼンテーション等、コミュニケーション能力が進学・就職の際にも重視されていることは言うまでもない。

一方、(社)日本経済団体連合会は「主体的なキャリア形成の必要性と支援のあり方」(平成18年6月)の中で、次のように指摘している(資料7)。

【資料7 (社)日本経済団体連合会「主体的なキャリア形成の必要性と支援のあり方」】

従来、日本の企業の多くは、現場に対する深い知識と理解、変化にフレキシブルに対応する力、問題発見・課題解決能力など、いわゆる「現場力」に支えられてきた。そこでは個々人の経験の積み重ねが仕事を遂行する上での大きな要素であり、先輩から後輩へ自然な形で技術・技能(匠)の伝承も行われていた。かねて我が国企業では、人と人のつながりを重視した経営を行ってきたのである。

しかしながら、グローバル化やICTの発展に伴う新たな技術・技能の登場によって、これまで蓄積してきた仕事の経験がそのまま活かされるとは限らないような状況となった。(中略)

一方、インターネットやメールの普及によって、情報の伝達においてもメールでやり取りすることが多くなってきた。こうした状況変化は、時間や距離の壁を越えてコミュニケーションをとることが可能になった反面、直接顔を合わせて話をする機会が少なくなり、相手に自分の気持ちを伝える、逆に相手の気持ちを読み取るといった意思の疎通の難しさの問題を生じさせている。

このような現場力の低下を如何に向上させていくかが、今日の企業にとって喫緊の課題である。そのためには、何よりも話す力・聴く力をベースとした「コミュニケーション能力」の向上と、それによる企業風土の活性化が不可欠といえる。その上でさまざまな技術・技能、ノウハウ、構想力を備えた多様な人材が、密接に連携を図りながら仕事を進めていくことができるかどうかが今後の大きな課題となる。

この報告書から分かるように、企業の現場でも、従業員同士のコミュニケーション能力の向上を喫緊の課題として取り上げ、対応を求めている。それは、コミュニケーション能力が何歳になっても、それぞれの年齢や仕事の内容に応じて必要となる能力だからである。したがって、企業が採用時に重視する要素としてコミュニケーション能力を挙げているのも当然のことである。(社)日本経済団体連合会が平成17年5月に実施した「新卒者採用に関するアンケート調査」において、企業が採用に当たって重視する要素の順位を見ると、「コミュニケーション能力」が第1位であり、これを最低限必要な

能力ととらえていることが分かる。(資料8)

今日、職場や学校を取り巻く環境が変化する中で、コミュニケーション能力に明確な定義を与え、意識的に育成することは大きな意義があると考えられる。

これまで記したような高等学校普通科の進路指導の実情、生徒を取り巻く環境変化や進路希望の実態、企業からのニーズ等を鑑み、生徒のキャリア発達と生徒が直面する当面の進路指導の両者に機能する目標を立てることが有効であると考え、人間関係形成能力、特に、「コミュニケーション能力の向上」を中心に設定したキャリア教育の取り組み方の一例を示したい。

生徒の全人的な成長・発達を支援する視点に立って、キャリア教育を推進すべきであることは言うまでもないことだが、「コミュニケーション能力の向上」は、情報活用能力、意志決定能力、将来設計能力の基盤になり、高等学校普通科でのキャリア教育推進の一助になる部分であるので、参考にしてほしい。

3 コミュニケーション能力とは

高校生がコミュニケーション能力を身に付けることが重要であることは前段で述べたが、ここでは、「コミュニケーション能力」とは何かをみていきたい。

平成14年11月国立教育政策研究所の調査研究報告書「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」中の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」では「コミュニケーション能力」は以下のように示されている(資料9)。

【資料9 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」より作成 太字は、「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す】

			高等学校
職業的(進路)発達の段階			現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
○職業的(進路)発達段階 各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から捉えたもの。			<ul style="list-style-type: none"> 自己理解の深化と自己受容 選択基準としての職業観・勤労観の確立 将来設計の立案と社会的移行の準備 進路の現実吟味と試行的参加
職業的(進路)発達にかかわる諸能力			職業的(進路)発達を促すために育成することが期待されている具体的な能力・態度
領域	領域説明	能力説明	
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力能力・共同してものごとに取り組む。	【コミュニケーション能力】多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	<ul style="list-style-type: none"> 自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する。 異年齢の人や異性等、多様な他者と、場に応じた適切なコミュニケーションを図る。 リーダー・フォロワーシップを発揮して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。 新しい環境や人間関係を生かす。

【資料8 (社)日本経済団体連合会「新卒者採用に関するアンケート調査」】

要素	%
コミュニケーション能力	75.1
チャレンジ精神	52.6
主体性	52.5
協調性	48.7
誠実性	40.1

この中の「異年齢の人や異性等，多様な他者と，場に応じた適切なコミュニケーションを図る」と「リーダー・フォロワーシップを発揮して，相手の能力を引き出し，チームワークを高める」の文言を更に詳しく解釈すると以下ようになる。

異年齢の人や異性等，多様な他者＝自分の身近な人以外の人々のこと。

場に応じた＝周囲の人の反応を意識し，他人の表情や言動から，自分が何がしかの行動を取ったことへの評価に相当する情報を見付け出し，次の手だてを考えること。

適切なコミュニケーション＝感情，意思，情報などを，受け取り合うこと，あるいは伝え合うこと。

リーダーシップ＝組織構成員に対してリーダーの目標を明確に示し，その目標達成のための仕掛けをつくり，組織構成員を奮い立たせること。

フォロワーシップ＝リーダーの指導力や判断力を補完し，組織成果を最大化すること。

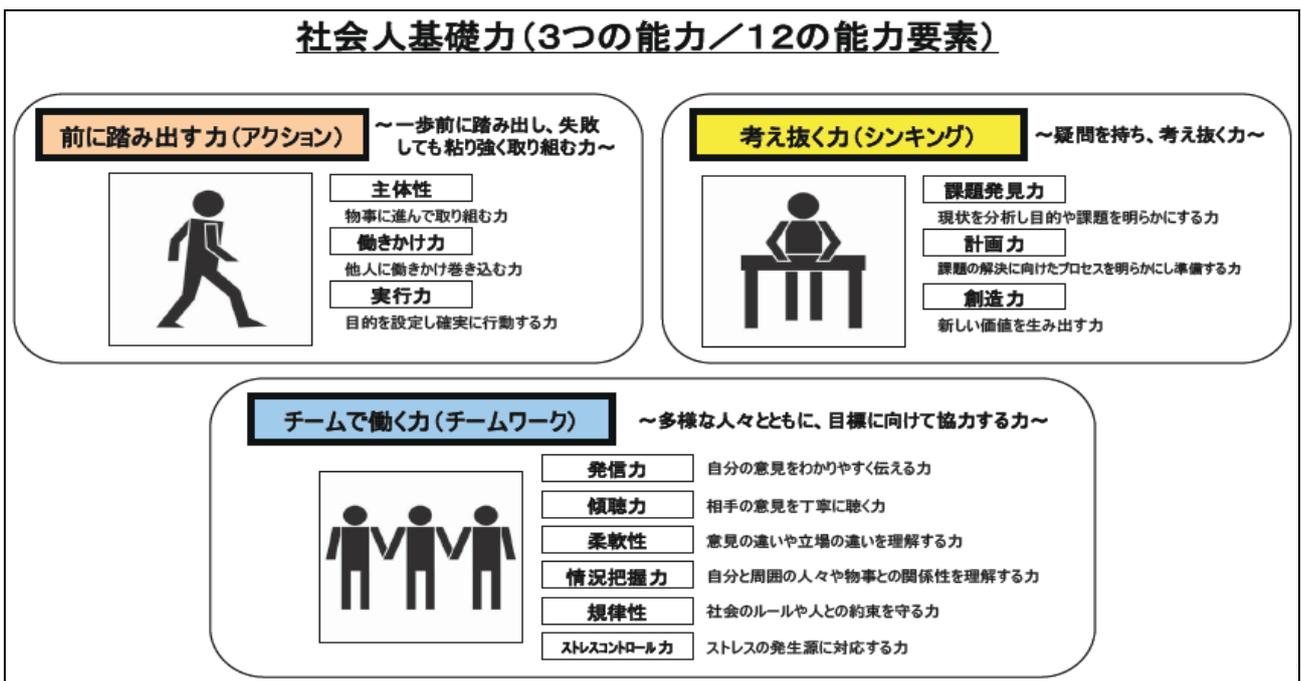
相手の能力を引き出す＝相手に質問を投げ掛け，話を聞くことにより，相手の考えが整理され，気が付きが深まり，自発的に行動を起こしたくなる気持ちを生じさせる。

チームワーク＝集団を構成する一人一人がバラバラにならずに団結して活動して，互いに助け合い，補完し合い，力を出す集団活動。

自分自身にかかわることが「適切なコミュニケーション」，「リーダーシップ」，「フォロワーシップ」で述べられ，相手については，「異年齢の人や異性等，多様な他者」，「チームワーク」，「相手の能力を引き出す」で触れられ，「場に応じた」でコミュニケーションの行われる場について言及している。つまり，コミュニケーション能力や態度は，「自分」，「相手」及びコミュニケーションの行われる「場」の三つの視点をもつことにまとめられる。

「コミュニケーション能力」については，経済産業省が提唱した「社会人基礎力」という概念の中で，細分化されて示されている（資料 10）。なお，「社会人基礎力」は産業界で求められる能力の変化を受け，基礎学力・専門知識を生かして，職場や地域社会で活躍するために必要な基礎的な能力で，平成 18 年 2 月に「社会人基礎力に関する研究会」で整理されたものである。

【資料 10 経済産業省「社会人基礎力」】



先ほどまとめた三つの視点にかかわるものは、大なり小なり「社会人基礎力」のほとんどすべてに関連があるが、その中でも特に関連が強いものは、次のようにまとめられる。

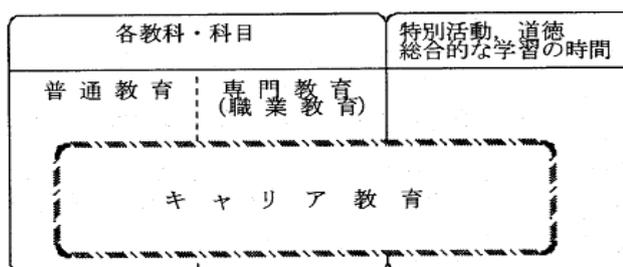
「自分」：「発信力」
自分の意見を分かりやすく伝える力
「相手」：「傾聴力」
相手の意見を丁寧に聴く力
「場」：「状況把握力」
自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力

したがって、高等学校普通科で、生徒の「自分の意見を分かりやすく伝える力」、「相手の意見を丁寧に聴く力」、「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」の育成を図り、それらの基にある態度の育成を目指すことが重要になってくる。

4 高等学校普通科でのキャリア教育推進のための活動

ここで、生徒の「コミュニケーション能力の向上」を中心として、高等学校普通科でキャリア教育を推進していく手法について考える。

【資料 11 文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議(報告書)」】



生徒のキャリア発達には、生徒が行うすべての学習活動等が影響するため、キャリア教育は学校のすべての教育活動を通して推進されなければならない(資料 11)。

しかし、高等学校普通科では、各教科の学習を通して、大学等の上級学校へ進学できる力を身に付けることを目指した授業が展開され、キャリア教育の推進を強調すれば、各教科の授業等で大学等へ進学する力を身に付けることが妨げられるのではないかと、という誤解が生じていることが推測できる。

したがって、高等学校普通科でキャリア教育を推進するに当たっては、この点を認識し、進学指導とキャリア教育は相互補完的な関係であり、生徒の利益に^{かな}適うものであるという認識を教員一人一人がもてるような手法が必要となる。

(1) 学校教育目標へのキャリア教育の位置付け

学校教育の今日的な課題や生徒の実態等を踏まえて、学校教育目標を設定することになるが、その意味においても、キャリア教育推進は学校教育目標として設定する必要がある。

学校教育目標を具現化するためには、校長の示す経営ビジョンに基づき、校長のリーダーシップと全教員の共通理解の下、コミュニケーション能力の向上の重要性を念頭に置きつつ、教育活動全般でキャリア教育を推進することが重要である。

(2) キャリア教育年間計画の作成

特別活動及び総合的な学習の時間、「ショート・ホームルーム」と呼ばれている時間等を活用したキャリア教育年間計画を考えてみる。特別活動が各教科の学習での成果等を様々な体験活動や話し合い等を通して発展させるというねらいをもっているため、その時間に職業や進路に関連する学習活動を行い、キャリア教育を推進する核として有意義に活用することが、一つの有効な手法となる。

ここで、特別活動及び総合的な学習の時間を中心に、コミュニケーション能力の育成に主眼を置いたキャリア教育への取組を例示するので、参考にしてほしい（資料12）。

平成〇〇年 高等学校普通科「キャリア教育」指導計画（例）

【資料12】

学年	学期	目標	項目	L T	進路関係行事	総合的な学習の時間
第1学年	1学期	自己理解	○新入生オリエンテーション			○
		職業理解	○進路講演会（言葉遣い・マナーについて）		○	
	○生徒個人面談			○		
	○進路希望調査		○			
	夏季休業	職業理解 コミュニケーション能力育成	○進路適性検査	○		
○職業人インタビュー					○	
2学期	自己理解 コミュニケーション能力育成 他者理解	○職業インタビュー発表会	○			
		○進路講演会（類型選択について）		○		
3学期	自己理解 コミュニケーション能力育成 勤労観育成	○生徒個人面談		○		
		○進路希望調査	○		○	
		○自分史作成			○	
第2学年	1学期	職業観・勤労観育成	○自分史発表会（クラス）			○
		試行的社会参加	○進路希望調査	○		○
	夏季休業		試行的社会参加 職業観・勤労観育成	○ボランティア体験（地域清掃）		○
		○進路希望調査				○
2学期	職業観・勤労観育成 将来設計	○インターンシップ実践			○	
		○インターンシップ事後指導（プレゼンテーション）		○		
3学期	進路選択 将来設計	○生徒個人面談		○		
		○大学等説明会（校内）		○	○	
		○小論文・作文指導			○	
第3学年	1学期	進路選択 将来設計 コミュニケーション能力育成	○ボランティア体験（老人保健施設等訪問）		○	
			○進路希望調査	○		○
			○大学等見学会		○	
			○進路希望調査	○		○
			○進路講演会（教育実習生）			○
			○生徒個人面談		○	
			○試験のための面接指導		○	

年	夏季休業	進路選択 将来設計 コミュニケーション能力育成	○小論文指導 ○オープンキャンパス参加 ○進学学習会 ○就職面接指導		○		
		2 学期	進路選択 将来設計	○生徒個人面談 ○小論文指導・面接指導		○	○
		3 学期	進路選択	○生徒個人面談		○	

なお、文部科学省は平成18年11月に「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書ー普通科におけるキャリア教育の推進ー」の中で、高等学校普通科でのキャリア教育指導計画を提示した。A高等学校（進路希望の多様な生徒が在籍する全日制普通科）とB高等学校（進学希望の生徒が多く在籍する全日制普通科）の2例があるので、参考にしてほしい（資料13, 14）。

		A高等学校「3年間の指導計画」(例)		【資料13】		
		生徒の主な活動		* 教科との関連は除く		
学年	月	学校行事等	総合的な学習の時間	ホームルーム活動		
1 学 年	4	○入学式 ○新入生オリエンテーション ○集団宿泊研修 ○各種進路講演会 ○職業理解月間	○中学校からの移行について検討 ○「キャリア」へのガイダンスⅠ 「キャリア」の理解・設計 ○各種進路講演会 ○職業別講話 ○企業人インタビュー (テーマ別プレゼンテーション) ○働くことの必要性・意義の理解	○生活・学習目標設定 ○高校生活のガイダンス ○集団宿泊研修事前・事後指導 (意義・目的の理解) ○夢・将来像を描く ○進路希望調査 ○職業研究 (産業分類・職業分類)	○中学校とのキャリア教育移行研修会 ○教員対象キャリア教育研修会 ○保護者へ3年間のキャリア教育計画の説明会 ○社会人・職業人の理解 ○三者面談 ○個人面談 ○職業人講演会 ○生徒と保護者の語る会	
	5					
	6					
	7	○ボランティア活動の参加 ○夏休み職業人インタビュー (テーマ別プレゼンテーション) ○選択教科(模擬講義)体験				
	8	○履修科目相談月間	○職業ガイダンスセミナー ・企業の選択・依頼・実施 ○「○○になるためのチャート」 作成	○コース選択・科目選択を考える ○進路希望調査	○個人面談	
	9					
	10					
	11	○高校生企業体験(全員) ・インターンシップ ・ジョブシャドウイング ○大学・短期大学・専門学校・ 企業訪問 (プレ学問・企業・職業研究) ○3年生と語る会		○事前・事後指導 (意識形成を図る) ○進路希望調査	○個人面談 ○中学校へキャリアの成長を報告 ○春休み期間を利用して、インター シップ等を5日間以上実施する ○春休み期間を利用して上級学校・企 業等への訪問	
	12					
	1					
	2					
	3					
2 学 年	4	○企業体験・大学・短期大学・ 専門学校訪問のまとめと発表 ○企業・職業研究月間 ○学問研究月間	○整理・反省・課題の提示、今後 への抱負 (テーマ別プレゼンテーション) ○「キャリア」へのガイダンスⅡ 「キャリア」の理解・設計	○進路適性検査の実施 ○夢・将来像を描く ○進路希望調査 ○事前・事後指導 (意識形成を図る)	○教員対象キャリア教育研修 ○保護者へキャリア教育説明会 ○全体集会等で他者へ情報提供 ○保護者の進路意識・希望調査 ○三者面談 ○個人面談	
	5					
	6					
	7	○論述・プレゼン特講 ○ボランティア活動の参加 ○進路研修の実施 (進路希望別インターンシップ・ 上級学校研修)	○進路研修報告会	○事前・事後指導 (体験の共有化を図る)	○小論文講座開始 ○グループ別活動	
	8	○進路ガイダンス	○各テーマ別の出張講義等を開催 し、進路先の理解を深める	○事前・事後指導 (社会や産業の動向の理解意識 形成を図る)	○グループ別活動	
	9		○進路別経済講座			
	10					
	11	○大学・短期大学・専門学校・ 企業訪問 (リトライ学問・職業研究) ○3年生と語る会		○事前・事後指導 (意識形成、体験の共有化を図る)		
	12					
	1					
	2					
	3				○春休み期間を利用して 上級学校・企業等への訪問	
3 学 年	4	○推薦入試説明会 (就職・進学希望者)	○「キャリア」へのガイダンスⅢ 「キャリア」の理解・設計	○学習計画(補講等受講) ○進路希望調査 (具体的な将来像を描く)	○教員対象キャリア教育研修会 ○保護者へキャリア教育説明会 ○推薦等の手続き説明・指導	
	5					
	6	○進路ガイダンス	○進路希望別の出張講義等を開催 し、自ら進路の理解を深める	○事前・事後指導 (意識形成を図る)	○個人面談 ○三者面談	
	7					
	8	○進路研修の実施 (進路希望別インターンシップ・ 上級学校研修)		○事前・事後指導 (意識形成を図る)	○夏休み、長期の職場実習の依頼 ○オープンキャンパス等の活用	
	9		○ライフ・プランニング			
	10					
	11				○三者面談	
	12				○就職・指定校、公募制推薦出願指導 ○A○入試等合格者への指導 ○一般受験者三者面談、出願指導	
	1			○下級生へキャリア教育レポート 作成		
	2					
	3	○下級生と語る会				

B高等学校「3年間の指導計画」(例)

【資料14】

* 教科との関連は除く

学年	月	学校行事等	生徒の主な活動		教科との関連は除く
			総合的な学習の時間	ホームルーム活動	関連・連携する事項 その他
1 学 年 可 能 性 を 広 げ て 探 索 す る 時 期	4	○入学式	○「キャリア」へのガイダンスⅠ ○先輩の講話「なぜ学ぶのか、高校生活を振り返って」 ○作文「未来予想図」 ○自己紹介ゲーム ○自己理解 職業レディネステスト ○企業人インタビュー ○職業研究 ①働くことの意義 ②職業分類 ③生涯賃金 ④法律 ○志望別グループ編成 ○職業ガイダンスセミナー ○大学シラバス研究Ⅰ ①シラバスとは何か ②シラバスを読んでみよう ③キーワードピックアップ ④レポート作成	○自己紹介 ○集団宿泊研修事前・事後指導 ○進路希望調査 ○学習計画 ○事前・事後指導 (クラス別プレゼンテーション) ○進路希望調査 ○事前・事後指導 (学年プレゼンテーション) ○事前・事後指導 (グループ別プレゼンテーション) ○1年間の活動の整理	○教員対象キャリア教育研修会 ○保護者へ3年間のキャリア教育計画の説明会 ○全体集会等で高校生活への必修条件の説明 ○個人面談 ○三者面談 ○特講 レポートのまとめ方 ○個人面談 ○中学校へキャリアの成長を報告 ○個人面談
	5	○新入生オリエンテーション ○集団宿泊研修			
	6	○コース選択説明会			
	7	○文化祭 ○ボランティア活動の参加			
	8				
	9	○体育祭			
	10				
	11				
	12				
	1				
	2	○3年生を送る会			
	3				
	2 学 年 個 々 の 可 能 性 に つ い て 吟 味 す る 時 期	4			
5					
6					
7		○文化祭 ○ボランティア活動の参加			
8		○オープンキャンパス			
9					
10		○体育祭			
11		○企業訪問型修学旅行			
12					
1					
2		○3年生を送る会			
3					
3 学 年 現 実 的 な 選 択 ・ 決 定 の 時 期		4	○入試説明会	○「キャリア」へのガイダンスⅢ ○大学シラバス研究Ⅱ ①進路選択のためにシラバス再読 ○進路プランニング ①大学卒業後の自分の姿 ②学部選択 ③大学選択 ○志望理由書作成 「この分野に進む」 ○課題研究 「社会と学問・論点整理」 ①新聞スクラップ ②小論文分析 ③論点整理 ④討論会 ○企業人の講話 「学問と産業社会」 ○大学生の講話 「大学生活とは」	○学習計画 ○進路希望調査 ○志望理由書発表会 (クラス別) ○事前・事後指導 ○事前・事後指導 ○3年間の活動の整理
	5				
	6				
	7	○文化祭			
	8	○オープンキャンパス(希望者)			
	9	○体育祭			
	10				
	11				
	12				
	1				
	2	○1,2年生とのお別れ会			
	3	○卒業式			

上記の3種類の「キャリア教育指導計画」を実行する場合に留意しなければならない点を挙げる。

それぞれの活動がイベント的にならないように、事前の学習で、明確な「尋ねたい点」を生徒にもたせ、活動を行う中で、その「尋ねたい点」に対する「答え」を探すようにさせる。そして、事後の学習で活動を振り返るようにさせ、「尋ねたい点」と「答え」を合わせて発表させる場面を設ける工夫等を考える必要がある。そうすることによって、生徒のコミュニケーション能力の向上を図ることができる。

また、それぞれの活動の後に、生徒に対してアンケートを実施したり、ワークシートでの活動をさせたりすることで、教員が個々の生徒の「キャリア発達」を把握していくシステムを構築することにより、生徒の将来就きたい職業や仕事への興味・関心を高めるような指導・助言をすることができる。そして、生徒のアンケートやワークシートを継続的に実施し、ポートフォリオやカルテの作成等の創意工夫を生かせば、より詳しく生徒の「キャリア発達」を把握することができ、同時に、キャリア教育の適切な評価活動となる。

5 おわりに

各学校においては、地域の状況、生徒の実態を踏まえ、育てるべき生徒像を明確にして、組織的、系統的なキャリア教育が実施できるよう、教育課程を見直し、充実改善を図られたい。この時、それぞれの学校で、特別活動と総合的な学習の時間、そして各教科等を有機的に関連付けた「キャリア教育の全体的な指導計画」を作成することが大切である。